

## 第3編 戸鳥土遺跡

遺跡略号 MSC-TT■

所在 地 南相馬市原町区押釜字戸鳥土

調査期間 平成19年6月4日～7月19日

調査員 阿部 知己・堤 仙匡・今野沙貴子



## 第1章 調査経過

戸鳥土遺跡は、平成10年度に原町市教育委員会（現、南相馬市教育委員会）が実施した表面調査によって塚跡3基（450m<sup>2</sup>）が確認されたことから「戸鳥土塚群（遺跡番号20600282）」として登録された遺跡である。常磐自動車道建設予定地内を対象にして、平成18年8月と同年9月の2次にわたり試掘調査が実施され、水無川の南側平坦面周辺2,000m<sup>2</sup>が保存を要する面積とされた（福島県教育委員会2007）。試掘調査の結果、平安時代の遺跡であることが判明したことから、保存範囲については「戸鳥土塚群」という遺跡名とは別に、名称を戸鳥土遺跡とした。以下に、調査の概要を記す。

6月4日には、小池田遺跡から調査員1名が移動し、調査区の範囲確認や周辺住民への挨拶、そして器材の搬入を実施した。6月7日、重機を導入し表土剥ぎを行った。試掘調査の結果から、調査区北側では遺構の確認できる地層まで浅いという知見が得られていたため、掘削の深さに気を配りながら表土剥ぎを実施した。6月13日、作業員34名が小池田遺跡から移動し、本格的な調査に着手する。調査区の西端に沿って、トレンチを設け堆積土層の確認作業を実施した結果、調査区北側の段丘面とその裾部では黒褐色の表土（L I）下に、基盤をなす褐色砂質土（L III）が、さらにその下層には無遺物層である暗褐色砂質土（L IV）と砂礫層（L V）が堆積することを確認した。

L IIは、調査区東側の段丘平坦面でのみ確認され、層中から縄文土器と土師器が少量出土したため、各グリッド内において堆積土層を除去することに、遺構の確認作業も併せて実施した。



図1 戸鳥土遺跡調査区位置図

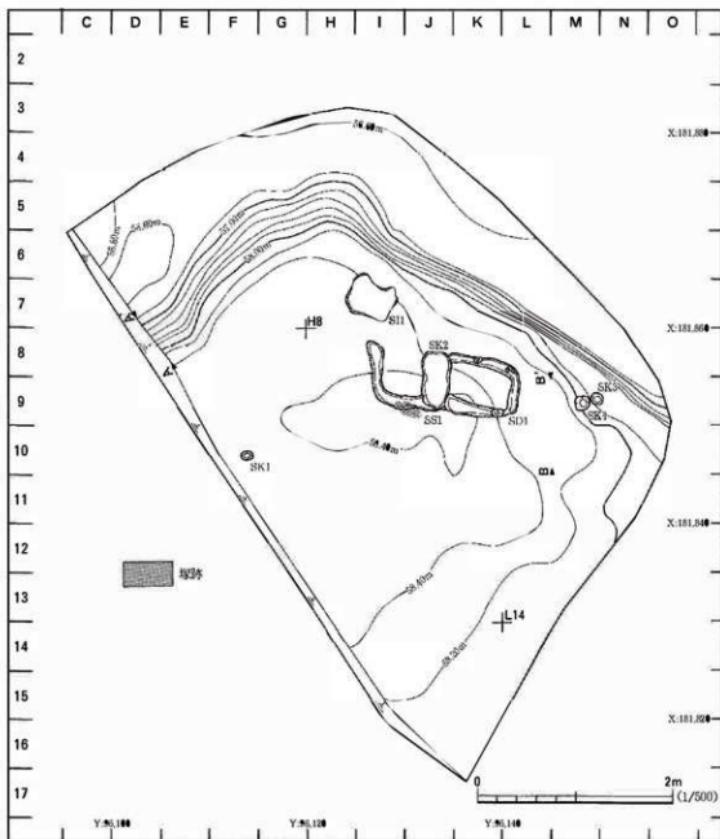


図2 遺構配置図

6月下旬には、検出作業が概ね終了し、L II 中から遺物が確認され始めたことから、L II の掘り下げとともに、検出遺構の精査そして図化作業を併せて行った。降雨による調査区周囲の浸水、調査区壁の崩落の心配も無く発掘調査は進み、堅穴住居跡、土坑、溝跡そして塚跡以外に遺構が無いことが分かってきた。

7月中旬以降は、堅穴住居跡の精査と併行して再度検出作業を実施し、掘り残しが無いことを確認した上で、7月19日に発掘調査を終了した。後日、福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団と東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所による現地の終了確認及び引き渡しを実施した。戸鳥土遺跡の発掘調査で検出した遺構は、堅穴住居跡1軒、土坑4基、塚跡1基、溝跡1

条で、発掘調査に要した日数は延べ34日である。

(阿部)

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺構の分布と基本土層

#### 遺構の分布(図2、写真1・2)

戸鳥土遺跡の調査は、水無川の南岸の平坦面を対象とした。検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑4基、塚跡1基そして溝跡1条である(図2)。

戸鳥土遺跡の占地する平坦面上は、耕地造成を受けているものの、現況では概ね一様な平坦面である。確認されたほとんどの遺構は、掘削を免れ黒色砂質土(L II)の残存した段丘平坦面の北側に集中している。段丘法面および裾部は、遺物を含んでいない暗褐色砂質土(L IV)と砂礫層(L V)が堆積するだけで、いずれの層からも遺構を確認できなかった。遺構別に分布状況をみると、縄文時代の土坑は、段丘平坦面東端で確認した2基のみである。平安時代の竪穴住居跡は、段丘平坦面の北端に位置した1号住居跡のみである。グリッドからの出土遺物を確認しても、住居跡周辺以外に土師器の密度の濃い箇所は認められなかった。1号住居跡以外の平安時代の遺構は、西側へと続く段丘平坦面上に散在している可能性が高い。塚跡は、常磐自動車道建設予定地内において、その痕跡を1基確認した。平成10年の表面調査の結果では、高さ1m、直径5mほどの規模の塚跡が3基存在したとされる。今回の発掘調査着手前と、平成18年度の試掘調査時には、塚跡と思われる高まりは確認できなかった。塚跡の高まりは、試掘・発掘調査の前に実施されたスギ林の伐採と伐採木の搬出の際に、重機で踏み潰されてしまっていた可能性が考えられる。

#### 基本土層(図3、写真2)

調査区の基本土層については、色調、混入物等から5層に細分された。堆積状況については、調査区の東・西縁と北西縁の3箇所で観察を行い、図3に基本土層を示した。

L Iは、段丘平坦面上では耕地造成時の盛土を含んだ黒褐色の表土で、平坦面以外では表土である。層厚は10~25cm。土中から遺物が僅かに出土する。

L IIは、黒褐色砂質土で、段丘平坦面の北側のみで確認できる。層厚は10~40cmで、土中には少量の縄文土器・土師器を含んでいる。

L IIIは、褐色砂質土で、段丘平坦面上のほぼ全域に堆積し、層厚は最大30cmの基盤層である。

L IVは、暗褐色砂質土で、段丘法面および裾部に堆積したL Vの漸移層である。層厚は最大50cmの基盤層である。

L Vは、褐色砂礫層で、段丘法面および裾部に堆積し、段丘平坦面上にも部分的に表出している。L III~Vの3層は、いずれも無遺物層である。

(阿部)

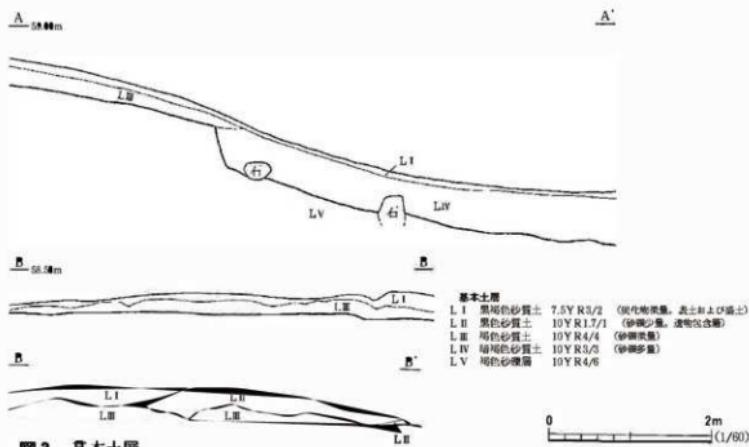


図3 基本土層

## 第2節 壇穴住居跡

戸鳥上遺跡では、壇穴住居跡1軒の調査を実施した。1号住居跡は、平安時代の壇穴住居跡で、段丘平坦面の北端に位置する。

### 1号住居跡 S I 1

#### 遺構 (図4, 写真3・4)

本遺構は、標高58mほどの段丘平坦面の北側縁辺部、H 7, I 6・7グリッドに位置し、L II上面で検出した。重複する遺構はない。

堆積土は2層に分けられ、いずれも周壁からの流れ込みと認められることから、自然堆積と判断した。

本遺構の平面形は、やや歪んでいるが隅丸長方形を呈し、長軸方位はN60°Wである。規模は上面および確認できた下端で長軸464cm、短軸は住居中央付近で320cmである。壁高は、比較的遺存状態の良い南西壁付近で約23cm、急な傾斜で立ち上がる。床面はL III中に形成され、床面の一部にはL IIIに含まれる大きな礫が露出していた。床面に踏み締まりは認められなかった。

床面からはカマド1基、小穴6個を確認した。カマドは、北壁の北東隅寄りに構築されていた。カマド周辺は搅乱を受けており、カマド右袖・煙道・煙出しなどは確認することはできなかった。カマド検出時にはカマドを構築したと思われる被熱・硬化した砂質土塊が住居跡北東付近で確認された。カマド堆積土は3層に分けられ、L 3はカマド袖部の構築土である。確認できたカマド燃焼部の規模は、幅約90cm、奥行き約75cmである。袖部には強く焼けて赤褐色を呈する範囲が見られ、

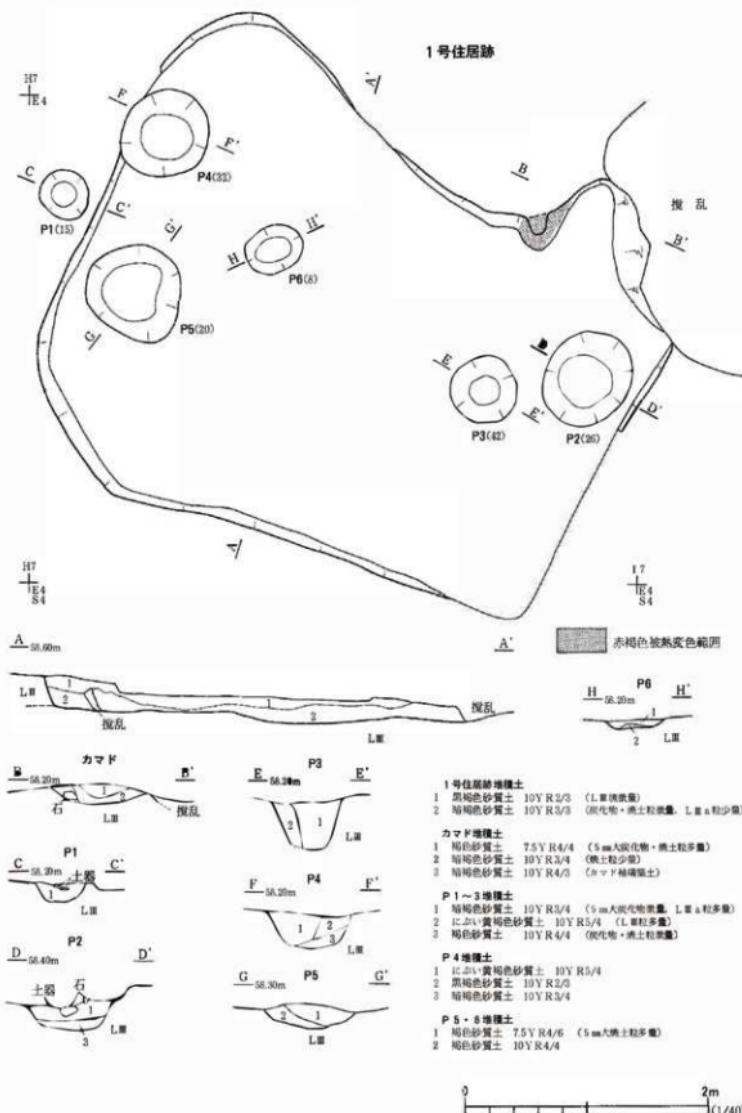


図4 1号住居跡

その厚さは最大3cmである。

6個の小穴(図1～6)のうち5個の小穴は、東西壁側と床面中央部に、図1のみ西壁の外に位置する。平面形は、図1・3・4はほぼ円形で、図2・5・6は梢円形を呈する。規模は、図1・3・4が直径40～75cm、図2・5・6が長軸50～86cm、短軸40～76cm、床面からの深さは8～42cmである。6個の小穴のうち、図3・4は位置と規模から主柱穴と考えられる。土層断面(図4E-E', F-F')をみると柱を抜き取った痕跡が認められる。図1は西壁中央の外側に、図2はカマドに近接して造られている。住居跡西側で検出された図5・6は、その堆積土に焼土塊が多く含まれる。小穴堆積土からは遺物を確認した。

#### 遺 物(図5・6、写真8)

遺物は、堆積土中から縄文土器4点、剥片1点、土師器562点(そのうち赤焼土器は少量)、鉄製品1点が出土し、このうち19点を図5・6に示した。図5-1～3・5・6・8は、内面黒色処理された土師器杯である。図5-2は、再酸化を受けたもので、本来内面に黒色処理が施されていたもので、内面にはミガキの痕跡が認められる。図5-11も、内面黒色処理された土師器杯の口縁部片で、字種は不明だが、外面に墨書きが残っている。図5-1・2・5の底部付近の調整をみると、底を回転糸切りで切り離した後、底面縁と体部下端に回転ヘラケズリを施している。

図5-4・7は、赤焼土器の杯で、いずれの底にも回転糸切り痕が明瞭に残っている。

図5-9・10は、内面黒色処理された高台付杯の高台部片である。いずれも高台は低く、10は「ハ」字状に開くものである。杯部の切り離し技法は、回転糸切りである。

図5-12～16、図6-1・2は、土師器壺の破片である。図5-12・13は、小型壺で、器面にロクロ調整が認められない。外面調整は口縁部から胴部上半にかけてヘラナデおよびナデ調整、胴部下半にはヘラケズリを施している。図5-14～16、図6-1・2は、大型壺の口縁部片で、図5-16を除く4点の外面にはロクロ調整を施している。口縁部の形状をみると3種類がある。口縁部が大きく外反するもの(図5-15)、口縁端部がわずかに外反するもの(図6-2)そして口縁部が短く外傾するもの(図5-14・16、図6-1)がある。

図6-3は、長さ3.5cm、断面が方形の棒状の鉄製品片である。同図3は釘または鉄錆の基部の可能性が考えられる。

#### ま と め

本遺構は、東西に長い隅丸長方形の竪穴住居跡で、規模は464×320cmである。床面中央に主柱穴が造られている。カマドは北東隅寄りで確認された。時期については、出土土器から9世紀末葉頃と考えられる。床面と住居跡内堆積土(図2)から採取した炭化物については、放射性炭素の年代測定を実施した結果、「 $1,130 \pm 30$ yr BP」と「 $1,160 \pm 30$ yr BP」という年代が示されている(付編1参照)。床面および図2に含まれる炭化物については、併せて樹種同定を行ったところ、クリおよびクマシデ属イヌシデ節(イヌシデ、アカシデなど)という結果を得ている(付編2参照)。

( 堤 )

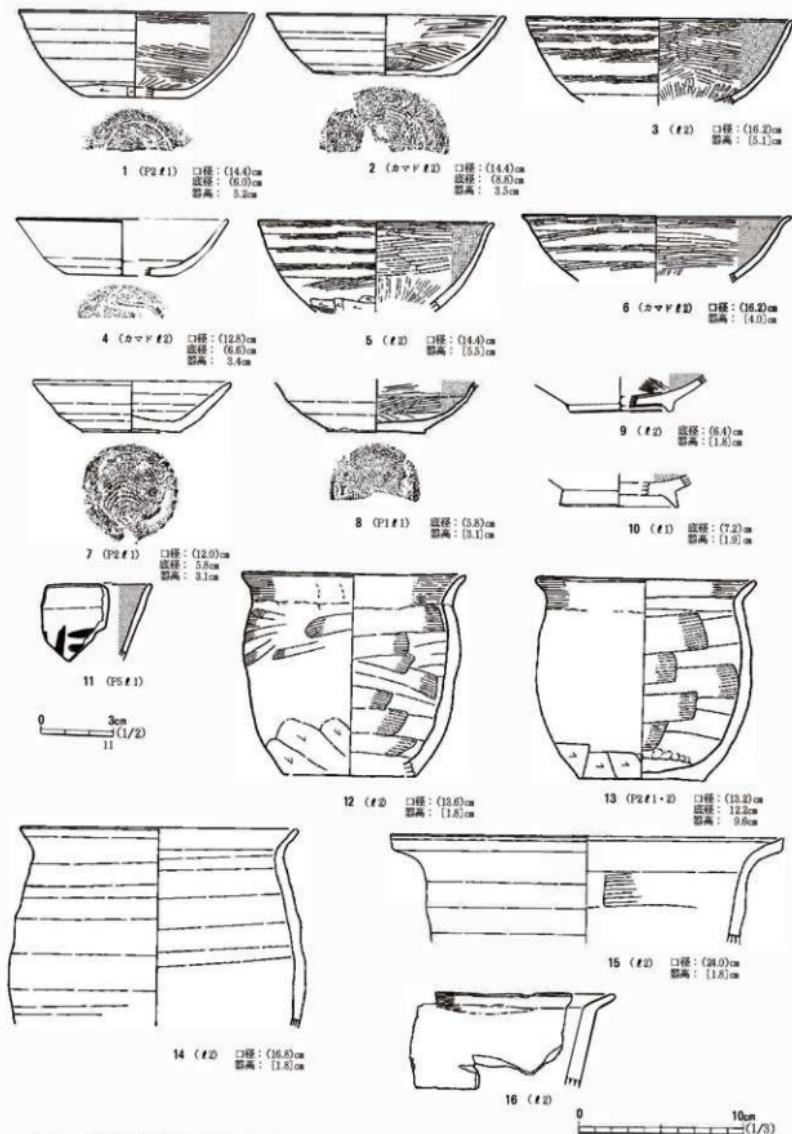


図5 1号住居跡出土遺物（1）

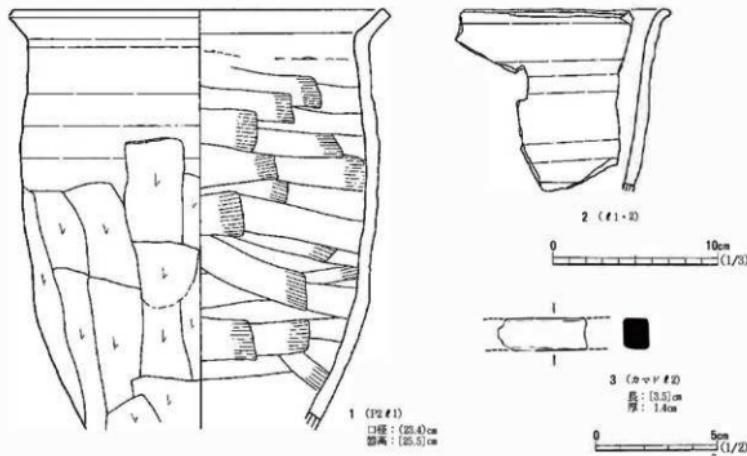


図6 1号住居跡出土遺物（2）

### 第3節 土 坑

戸鳥土遺跡では、4基の土坑の調査を実施した。その内の3・4号土坑については、検出面から縄文時代後期の土器が出土したことから、当該期の土坑と考えられる。最も規模の大きい2号土坑と1号土坑の所属時期については、出土遺物が無く特定できなかった。

#### 1号土坑 SK1(図7, 写真5)

本遺構は、調査区西端のF10グリッドに位置し、L III上面で検出した。平面形は梢円形である。規模は、 $114 \times 90\text{cm}$ 、検出面からの深さは8~18cmを測る。底面には凹凸があり、中央部で西側に向かい急に深くなる。周壁は、緩やかな傾斜で立ち上がる。堆積土は3層に分けられ、全体的にもレンズ状の堆積状況を確認できることから、自然堆積と判断した。

遺物は、 $\ell$  2中から土師器杯・甕片が各1点出土した。細片のため図示していない。

本遺構は、梢円形の土坑であることだけ確認できたが、機能・時期を特定することは難しい。

#### 2号土坑 SK2(図7, 写真5)

本遺構は、調査区中央のJ 8・9グリッドに位置し、L III上面で検出した。南・北東部分でS D 1と重複し、本遺構の方が古い。平面形は不整梢円形である。規模は、 $580 \times 293\text{cm}$ 、長軸の方位N 2° E、検出面からの深さは30cmである。底面はL III中に形成され、拳大の礫が多く表出するもの

の概ね平坦である。周壁は、東側でほぼ垂直に立ち上がり、西側で緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分けられ、特にL2では壁際から流れ込んだ堆積状況が明確であることから、自然堆積と判断した。

遺物は、L1から土師器壺片5点が出土した。細片のため図示していない。

本遺構は、重複関係からSIIより古い不整梢円形を呈した土坑であることだけ確認できたが、時期と機能を特定することは難しい。

### 3号土坑 SK3(図7、写真5)

本遺構は、調査区東端のM・N9グリッドに位置し、LIII面で検出した。すぐ西側にSK4が隣接する。平面形は、上端で梢円形、中端・底面で円形状である。規模は上端で164×132cm、中端で直径110cm、検出面からの深さは38cmである。底面はLIV中に形成され、ほぼ平坦である。周壁は、南においてはほぼ垂直に立ち上がり、北においては若干緩やかな傾斜で立ち上がる。堆積土は1層で、LIII粒が多く含まれている。周壁の崩落や、壁際からの流れ込みによる自然堆積土と考えている。遺物は出土しなかった。

本遺構は、土坑の規模・形態から貯蔵穴と考えられる。時期については、隣接するSK4との関連から縄文時代後期前葉頃と考えられる。

### 4号土坑 SK4(図7、写真5)

本遺構は、調査区東端のM9グリッドに位置し、LIII面で検出した。すぐ東側にSK3が隣接する。平面形は、上端・底面ともに隅丸方形を呈する。規模は一辺132～146cm、検出面からの深さは58cmである。底面はLIV中に形成されており、ほぼ平坦である。周壁は、南においては急傾斜で立ち上がり、北においてはオーバーハングして立ち上がる。堆積土は、5層に分けられ、すべての層がLIIIに起因する砂礫やLIII粒を多く含み、壁際から土が流れ込んだような堆積状況も確認できることから、自然堆積と判断した。

遺物はL1・5から縄文土器胴部・底部片9点が出土した。細片のため図示していない。出土した土器片の厚さと胎土を観察すると、本遺構の位置するM9グリッドのLIIから出土したことから遺構外出土遺物とした縄文時代後期の土器(図11-1～7)と同一個体である可能性が高い。

本遺構は、土坑の規模・形態から貯蔵穴と考えられる。時期については、本遺構からの出土遺物そして本遺構の位置するM9グリッドのLIIから出土した縄文土器(図11-1～7)が、本遺構に伴う可能性が高いと判断されることから縄文時代後期前葉頃と考えられる。

(今野)

第3編 戸鳥上遺跡

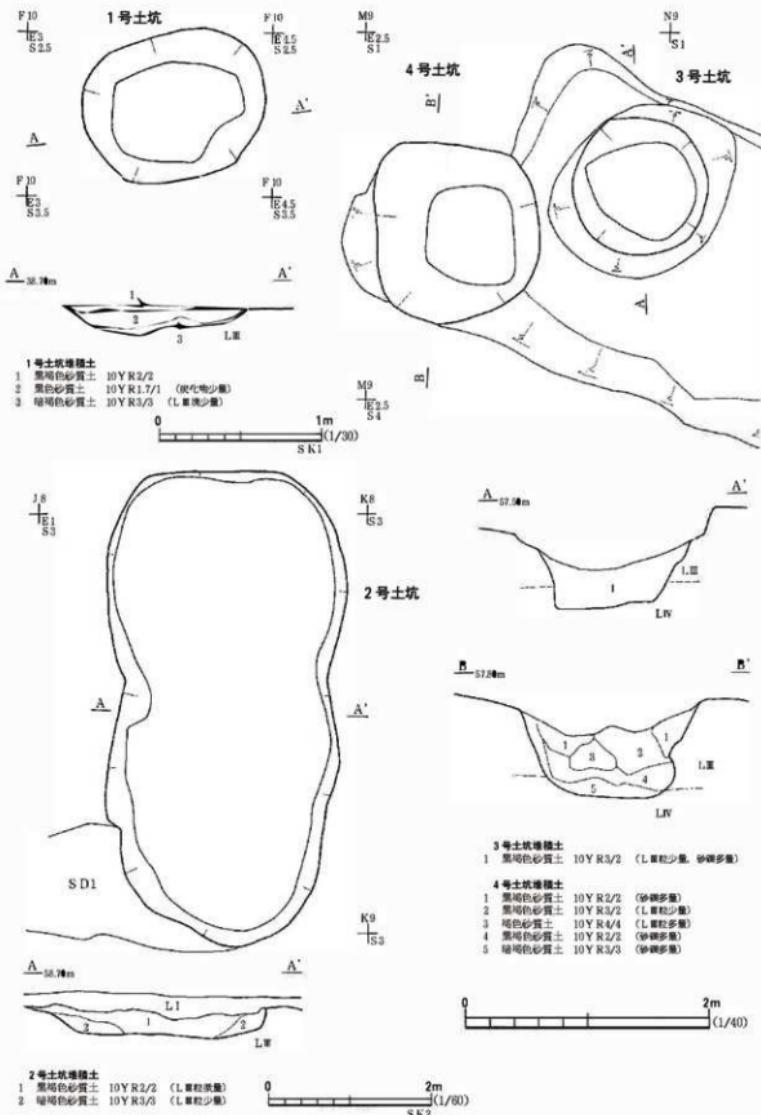


図7 1～4号土坑

## 第4節 塚 跡

戸鳥土遺跡では、1基の塚跡の調査を実施した。既知の3基の塚跡は、試掘調査時には存在を確認できず、事前のスギ林の伐採と搬出の際に重機に踏み潰された可能性が高い。

### 1号塚跡 SS1(図8、写真6)

本遺構は、調査区中央のI・J 9グリッドに位置し、L III上面で検出した。中世の所産であるSD 1と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は、盛土を施された範囲として確認した。確認できた盛土は、長軸194cm、短軸116cmの不整橢円形の範囲に、最大13cmの厚さで貼られていた。盛土は2層に分けられる。どちらの層も明確な版築の痕跡は確認できなかったが、非常に硬く締まった粘質土である。盛土内には、安山岩、苦鉄質片岩、花崗閃綠斑岩など、8~32cm大の礫40点を含んでいた。これらの礫は、遺跡北側の水無川河川敷で採取できる。盛土の下には、土坑などの施設は掘り込まれていなかった。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、表面調査時に確認されていた塚跡の基底部分と考えられる。時期については、出土遺物が無く特定が難しいが、重複関係から中世以降と考えられる。  
(今野)

## 第5節 溝 跡

戸鳥土遺跡では、「し」字状に巡る溝跡の調査を実施した。

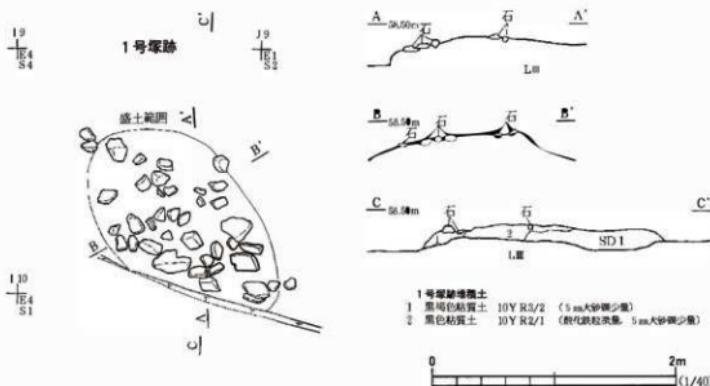


図8 1号塚跡

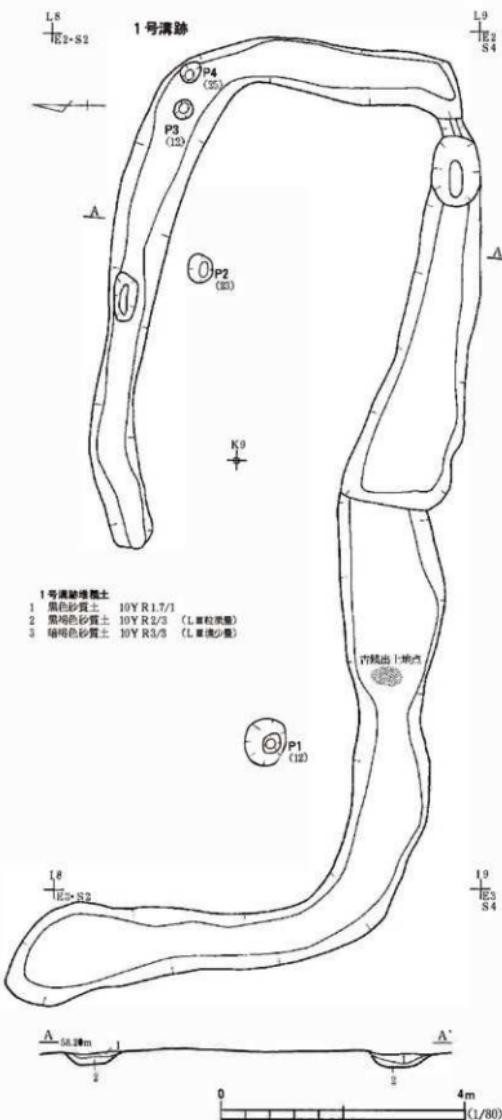


図9 1号溝跡

## 1号溝跡 SD1

## 遺構(図9、写真6・7)

本溝跡は調査区中央の I 8・9, J 8・9, K 8・9, L 8・9 グリッドに位置し, L III 上面で検出した。本溝跡は, S K 2 と S S 1 と重複し, S K 2 より新しく, S S 1 よりは古い。本溝跡は東西方向に長い「し」字状に掘り込まれていたが, 長方形状に全周していた可能性も考えられる。溝断面は逆台形状を呈し, 幅は 40 ~ 176cm, 検出面からの深さは均一でなく 20~55cm を測る。底面は L III 中に形成され, 基盤層の礫が所々表出しているものの平坦である。周壁は, 一部崩落している箇所もあるが, 基本的に急傾斜で立ち上がる。堆積土は 3 層に分けられ, いずれもレンズ状堆積を確認できることから, 自然堆積と判断した。

規模は, 東西方向の外法肩部分での距離が約 15.8m, 内法肩部分では約 13.4m である。南北方向での外法肩部分の距離は約 6m, 内法肩部分では約 3.5m である。本溝跡が方形に巡っていたと推定したときの溝跡内側の面積は約 47 m<sup>2</sup> である。

溝跡の内側と底面からは、合計4個の小穴(P1~4)を検出した。しかし、建物跡や柱列のような配置には並んでいない。小穴の平面形は、円形あるいは椭円形を呈する。規模は、長軸35~80cm、検出面からの深さは12~25cmである。小穴内堆積土は、いずれも溝内堆積土のℓ3と同じである。4個の小穴は、構造物を建てた配置ではないが、それぞれに柱状のものを樹立させるには十分な規模である。

#### 遺 物 (図10、写真7・8)

遺物は、ℓ3から土師器片6点、銭貨48点が出土した。そのうち、15点の銭貨については図10の左上から初鋤年代の古い順番に示した。

銭貨は、南側の溝跡内の50×30cmの範囲(図9中の網点部分)に散らばった状況で出土した。写真7dのとおり、孔に紐を通していった状況は伺えなかった。このことから推定すると、48枚の銭貨を布などに包んだもの、あるいはそのままの状態のものを溝底面に置いた様子が考えられる。

48点の銭貨のうち36点については文字の判読ができた。残りの12点については、破損は免れたが文字判読の不可能なもの10点、そして粉々に碎け文字判読不可能なものが2点分ある。文字の判読できた36点のうち、元祐通寶が10点と最も多く出土し(図10-10・11)、次に多いものが皇宋通寶の5点(同図6・7)、開元通寶(同図1)・熙寧元寶(同図8・9)・洪武通寶(同図14)が各4点、景祐元寶(同図5)と聖宋元寶(同図12)が各2点、咸平元寶(同図2)・祥符元寶(同図3)・天聖元寶(同図4)・大觀通寶(同図13)・永樂通寶(同図15)が各1点ずつである。いずれにも背文字は認められ

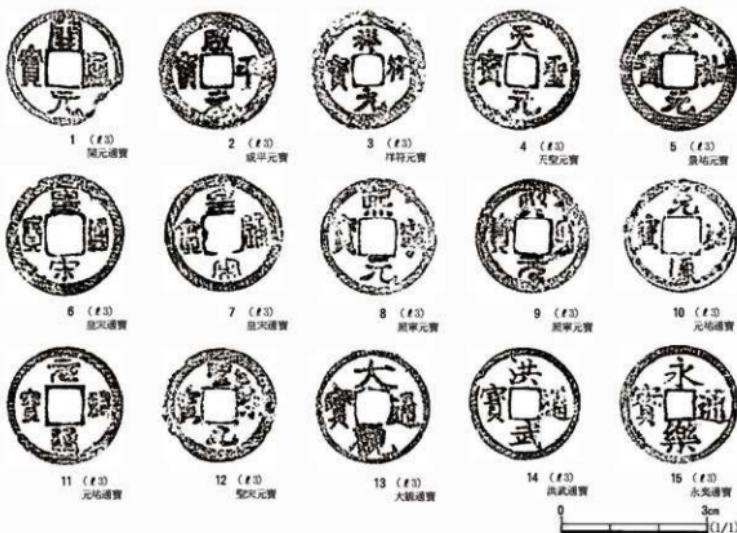


図10 1号溝跡出土遺物

なかった。また、皇宋通寶、熙寧元寶、元祐通寶の書体には、楷書と草書の2種類がある。

錢貨の形状を残した46点のうち、永樂通寶と洪武通寶(図10-14・15)の2点を除く46点について、鑄写しのため文字が不鮮明である点や、厚さが永樂通寶と洪武通寶と比べ半分またはわずかに肉薄である点などから模銅錢と考えられる。また、これらのうち最も新しい時代ものは永樂通寶で、初鑄は西暦1406年である。最も古い時代のものは、開元通寶で、初鑄は西暦960年である。

### ま と め

本遺構は、「し」字状または長方形状に遡る溝跡であることを確認した。しかし、機能を特定することは難しい。時期については、出土錢貨に46点の模銅錢と、2枚の明錢(永樂通寶と洪武通寶)が伴うことから15世紀頃と考えられる。

(今野)

## 第6節 遺構外出土遺物

戸鳥土遺跡では、段丘平坦面上に堆積した黒色砂質土(L II)中から少量の繩文土器と土師器が出土した。遺構外からの出土遺物については、一辺5mのグリッドごとに取り上げ、遺物には出土層位と併せてグリッド番号も付した。

### 遺物の出土状態

段丘平坦面上に堆積した黒色砂質土(L II)の堆積範囲は、後世の掘削を免れた平坦面北東側で確認できた。層の厚さは10~40cmである。L II中からは、繩文土器片57点、土師器片235点が出土した。繩文土器片は、段丘平坦面東側のSK 3・4周辺にあたるM 9グリッドからの出土が多く、それらは同じ個体の破片と考えられる。土師器片は、段丘平坦面北側のS I 1周辺から多く出土している。なお、堆積層の掘り込みに際しては、主として唐鐵を使用したため、石鐵など小型の遺物についてはサンプリングエラーが生じた可能性がある。

### 遺 物 (図11、写真8)

**繩文土器** 図11-9は前期後葉の浮島系土器である。無文地に平行沈線のみで文様を描いている。図11-1~7は後期前葉の綱取II式土器に比定されるものである。いずれも同一個体の深鉢形土器の破片である。器形は、胴部上半に膨らみを持ち、無文の口縁部は「く」字状に外傾斜する。胴部には斜行繩文の上から太目の沈線で三角形状の区画に、「J」字状の文様と盲孔を施している。

**弥生土器** 図11-10~12は、弥生時代前期に所属する土器片である。10は、鉢形土器の口縁部片で、充填繩文による方形の图形を描いている。11・12は、器面に斜行繩文を施すもので、11は胴部片、12は高台部の破片である。

**土師器** 図11-13~15は、1号住居跡周辺のグリッドから出土した赤焼土器杯(13)と高台付杯(14・15)の破片で、いずれも9世紀末葉頃と考えられる。13は、内外面ともロクロ調整のままで、

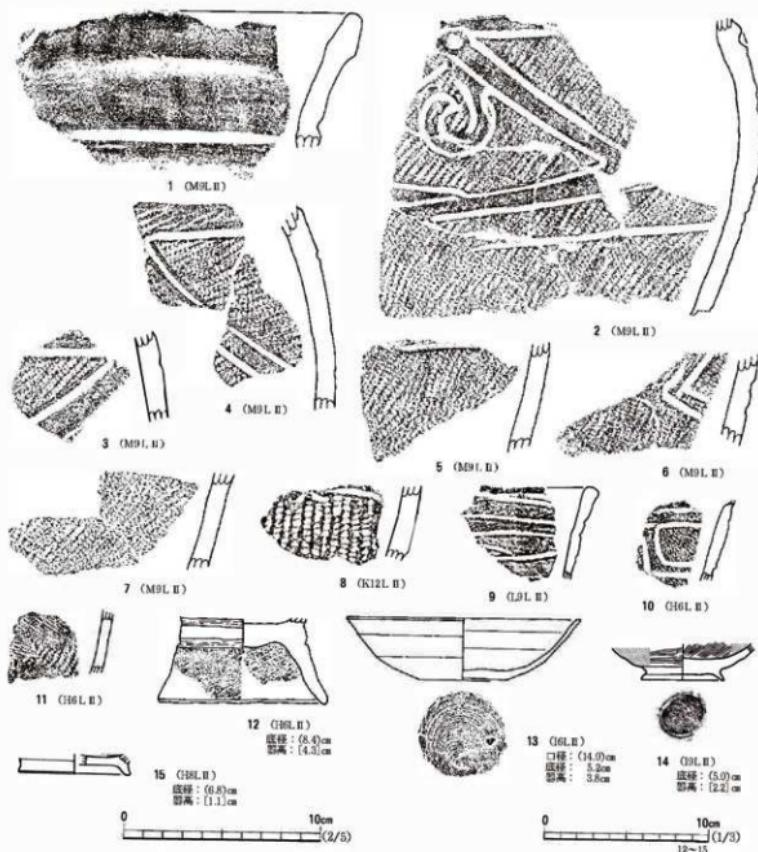


図11 遺構外出土遺物

底面に回転糸切り痕を明瞭に残している。14は、内外面を黒色処理された高台付杯片で、杯部底には回転糸切り痕を残している。

(阿 部)

### 第3章 ま と め

戸鳥土遺跡では、堅穴住居跡1軒、土坑4基、塚跡1基、溝跡1条を確認した。今回の発掘調査で所属時期の明らかにできたものは、縄文時代後期、弥生時代前期、平安時代、中世における痕跡

を確認した。

縄文時代については、調査区東端で確認した3・4号土坑が後期前葉頃の貯蔵穴であると考えられる。同時期の遺構は2基の土坑以外に確認されていない。出土遺物については、当該期の土器片が3・4号土坑周辺で僅かに出土している。弥生時代については、前期の土器片が僅かに出土したのみで、遺構および顯著な遺物包含層が形成されている状況も無かった。水無川に面した標高58m前後の段丘平坦面は、調査区の東・西および南側へと続いており、本遺跡周辺に縄文・弥生時代の集落跡が存在する可能性が十分に考えられる。

平安時代については、段丘平坦面の北東端から竪穴住居跡を1軒確認した。出土遺物から判断すると、住居跡の所属時期は9世紀末葉の年代が考えられる。今回の調査区内に当該期の遺構は1号住居跡以外に無かった。1号住居跡のみが単独で存在していた形になるが、縄文・弥生時代同様に、本調査区周辺の段丘平坦面上に他にも住居跡が散在していた可能性が考えられる。水無川を挟んで北岸の標高79m前後の丘陵上には、<sup>いしのり</sup>石神遺跡(平成19年度発掘調査終了、後日報告予定)が位置している。石神遺跡からは、ほぼ同時期の2軒の竪穴住居跡が確認されている。そのうち1軒の遺構内堆積土中から粒状滓が確認されたことから、精鍛・鍛鍊鍛冶に関わる作業を行っていたと推測される。さらに、石神遺跡の北100mの地点にある丘陵斜面には、試掘調査の結果から平安時代の精鍛・鍛鍊鍛冶に関する遺跡とされた中山C遺跡が位置している。水無川を挟んで南北約700m範囲の丘陵斜面および低段丘面上には、9世紀後半の住居跡が數軒ずつまとまりとして散在していた様相が伺える。平成20年度の中山Cの3遺跡を発掘調査によって、水無川流域の9世紀代の様相がさらに明らかになると思われる。

中世については、1号溝跡を確認した。今回確認した溝跡は、「し」字状に巡る形で確認できたが、溝本来の形状は長方形状に全周していた可能性が考えられる。周囲に散在する小穴の配置からは、建物が造られた可能性は無いと考えている。溝跡の所属時期については、出土した銭貨のうち最も新しく鋳造された銭貨の年代によって決定できる。このことから、1号溝跡の所属時期は、出土した2枚の明銭(永楽通寶と洪武通寶)のうち、「永楽通寶」が初めて鋳造された西暦1406年以降であることは確実である。鈴木公准氏の出土備蓄銭の時期区分によると、永楽通寶の伴う時期については「4期」とし、前後の実年代の検討から、15世紀第2四半期から第3四半期としている(鈴木1999)。当該期の遺跡は、水無川南岸の押釜地区では確認されていない。北岸の丘陵上にある石神遺跡では、当該期として2基の竪穴遺構が確認されている。そのうち1基の竪穴遺構としたものは、幅の狭い区画溝と複数の小穴から構成され、小規模の建物跡が造られていた可能性が考えられている。竪穴遺構は、丘陵南側縁に造られ、眼下に戸鳥土遺跡と水無川を一望することができる。周囲から永楽通寶、陶器器片、かわらけ、軒丸瓦片も出土しており、所属時期は15世紀頃と考えられる。

塙跡については、平成10年度の表面調査時に、本調査区内で合計3基確認されていた。発掘調査の結果、その痕跡を確認できたのは1基のみである。時期については、1号溝跡との重複関係から15世紀以降と考えられる。

(阿 部)



1 調査区全景

a 調査区近景（北から）  
b 調査区遠景（南上空から）



2 調査区全景、基本土層

a 調査区遺景（東上空から）  
b 基本土層1（東から）  
c 基本土層2（東から）



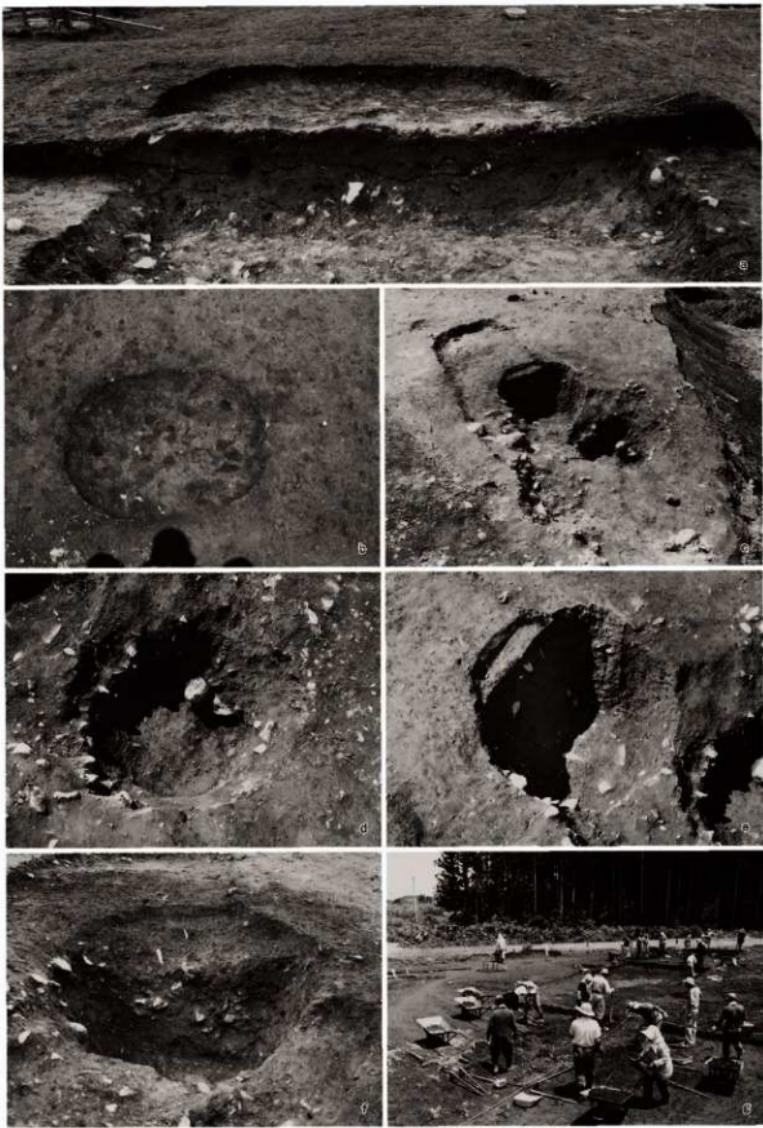
3 1号住居跡

a 全景(南から)  
b 十四(14から)  
c カマド上層(南から) d P 1遺物出土状況(南から)

第3編 戸鳥上遺跡

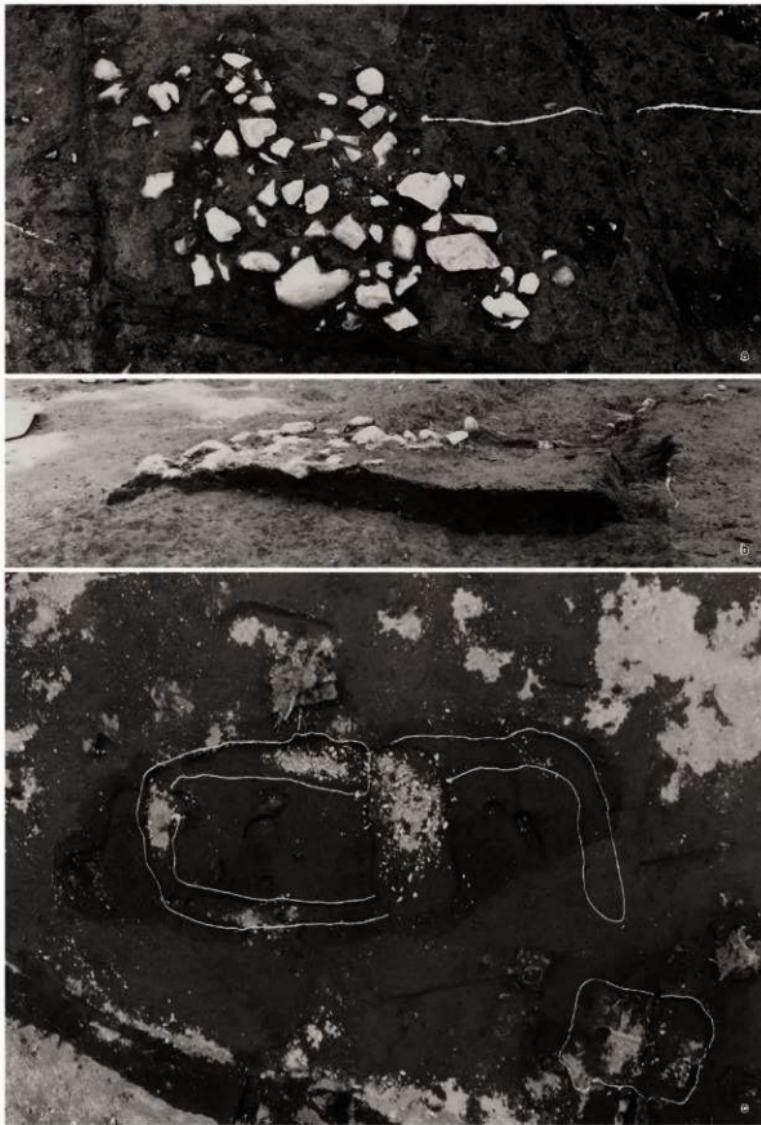


4 1号住居跡，2号土坑



5 1~4号土坑

a 2号土坑土層 (南から)	b 1号土坑全貌 (南から)	c 3・4号土坑全貌 (東から)
d 3号土坑全貌 (南東から)	e 4号土坑土層 (東から)	f 4号土坑土層 (東から)
g 作業風景 (西から)		



6 1号塚跡、1号溝跡

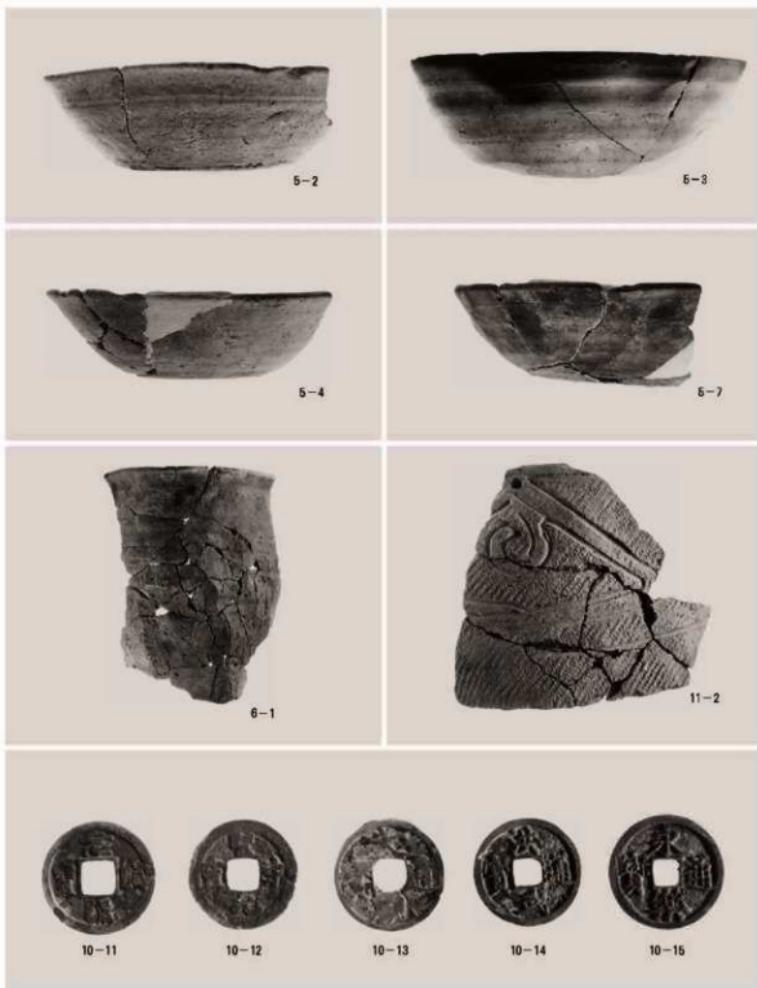
a 1号塚跡全貌 (南から)  
b 1号溝跡全貌 (東から)  
c 1号溝跡全貌 (北上空から)



7 1号溝跡

a 全景(西から)  
b 土層1(東から)  
d 遺物出土状況(南から) c 土層2(東から)  
e 1号溝跡作業風景(南から)

第3編 戶烏土遺跡



8 出土遺物

# 第4編 切付遺跡

遺跡略号 MSC-KT

所在地 南相馬市原町区馬場字切付

調査期間 平成19年7月9日～9月21日

調査員 阿部 知己・堤 仙匡・今野沙貴子  
鈴木裕一郎



## 第1章 調査経過

切付遺跡は、平成10年度に常磐自動車道建設地内を対象とした表面調査によって、その広がりは7,100m<sup>2</sup>と提示された(福島県教育委員会1999)。平成17年11月と平成18年5月の2次にわたって試掘調査を実施し、水無川の支流である笹部川の南岸周辺1,700m<sup>2</sup>が保存を要する面積とされた(福島県教育委員会2006・2007)。1,700m<sup>2</sup>の北側の範囲については、平成17年度の試掘調査の結果、保存の必要はないとされ、今回の発掘調査前に常磐自動車道建設に伴う橋脚建設工事が実施されていた。以下に、調査の概要を記す。

7月9日には、戸鳥土遺跡から調査員1名が現地に赴き、調査区の範囲確認や周辺住民への挨拶、そして器材の搬入を行った。7月10日、重機を導入し表土剥ぎを行う。試掘調査の結果から、厚い盛土の直下から遺構が確認できる知見が得られていたため、掘削の深さに気を配りながら表土剥ぎを実施した。7月23日、作業員10名が戸鳥土遺跡から移動し、本格的な調査に着手する。調査区の東・西端に沿って、トレッチを設け堆積土層の確認作業を実施し、調査区の東側では宅地造成時の盛土を含む黒色系の表土(L I a・b)下には、基盤をなす褐色砂質土(L III)が堆積することを確認した。調査区の西側では、暗褐色土砂質土の表土下から、遺物をわずかに含む黒褐色砂質土(L II)、

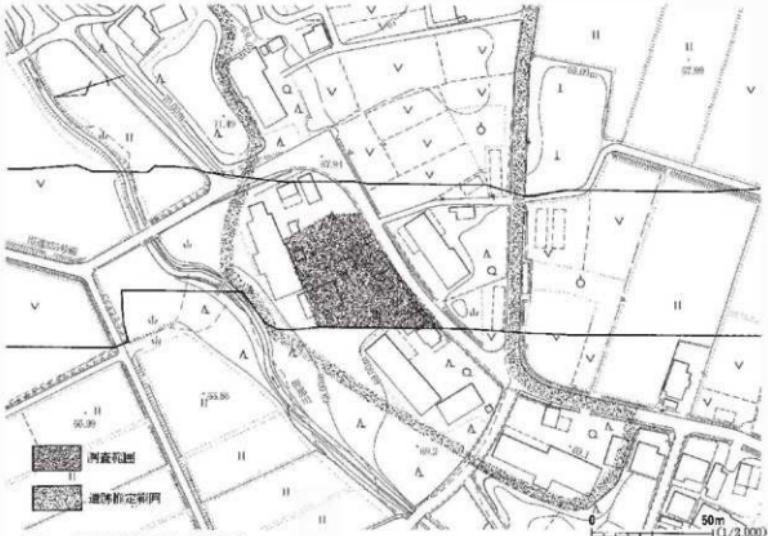


図1 切付遺跡調査区位置図

#### 第4編 切付遺跡

その下層にLⅢが堆積することを確認した。

LⅡは、調査区西側周辺でのみ確認され、層中から出土した遺物も少なかった。各グリッド内においては堆積土層を除去することに、遺構の確認作業を実施した。

8月上旬には、検出作業が概ね終了し、基盤層のLⅢ上面で無数の小穴と土坑が確認され始めたことから、LⅡの掘り下げとともに、検出遺構の精査そして小穴の図化作業を併せて行った。調査の進捗に伴い、土坑、小穴群そして調査区北西端の溝跡以外に遺構が無いことが分かってきた。

9月上旬には、降雨による調査区周囲の壁の崩れを防ぐための作業を実施しながら、小穴と土坑の調査を継続して行った。9月中旬以降は、小穴の精査と併行して再度検出作業を実施し掘り残しが無いことを確認した上で、9月20日に発掘調査を終了した。9月21日には、福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団と東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所による現地の終了確認及び引き渡しを行い、後日調査区については埋め戻しを実施した。

平成19年度の切付遺跡の発掘調査で検出した遺構は土坑24基、柱列跡3基、溝跡1基そして479個の小穴群で、発掘調査に要した日数は延べ44日である。  
(阿部)

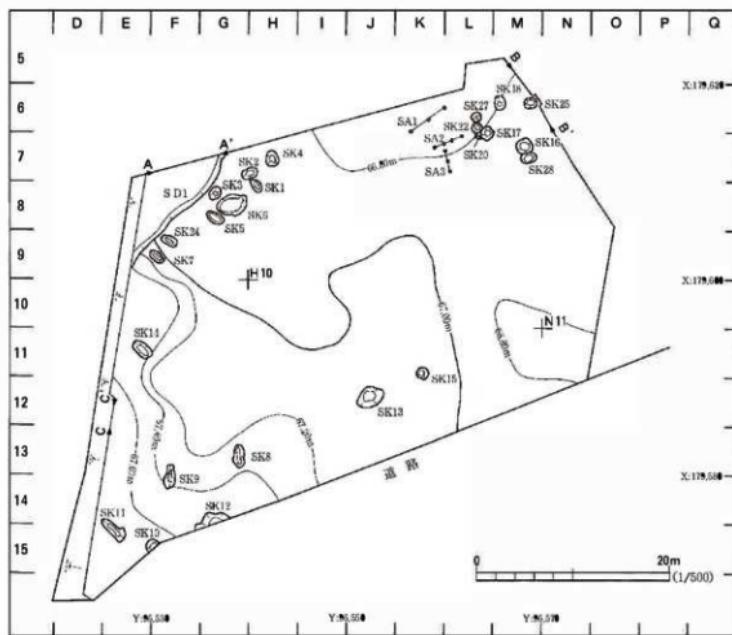


図2 遺構配置図

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺構の分布と基本土層

#### 遺構の分布(図2、写真1)

切付遺跡では、水無川の支流である笹部川南岸の平坦面を対象として発掘調査を実施した。検出された遺構は、土坑24基、柱列跡3基、溝跡1条そして479個の小穴群である(図2)。

切付遺跡の占地する平坦面上は、宅地造成を受けているものの、現況では概ね一様な平坦面である。確認された遺構は、宅地造成による掘削を受けた調査区の中央部、南東部を除いた区域に散在している。遺構別に分布状況をみると、8基の落し穴状土坑の内、6基(SK1・5・7・11・14・24)については長軸方向をほぼ同じくし掘り込まれている。残りの2基(SK8・9)については、先の6基と長軸方向を進めて掘り込まれている。また、近世末から近代に造られた裏込土を伴う7基の土坑(SK16~18・22・25・27・28)が、3基の柱列跡(SA1~3)とともに調査区の北東側に分布している。小穴群は、調査区東半分に密集し、特に土坑と柱列跡の周辺に多く分布している。

#### 基本土層(図3、写真2)

調査区の基本土層については、色調、混入物等からL I ~ L IIIの3層に細分された。堆積状況の確認は、調査区の東・西縁と北西縁の3箇所で観察を行い、図3に基づき基本土層を示した。

L I はa~cに3分類した。L I a・bは色調、混入物等が異なるものの、いずれも宅地造成時の盛土を含んだ表土である。層厚は、L I a・bは10~50cm、L I cは20~44cmである。

L I aは、暗褐色土で、調査区の西縁を除いた範囲に分布し、近年の宅地造成に伴う盛土と現表土である。

L I bは、黒褐色土で、調査区の北東側でのみ確認できる。L I bの図3中央の土層断面B-B' と図9左下のSK25土層断面A-A'を見ると、SK25と一部の小穴はL I bが堆積する以前に掘り込まれたと考えられる。このことから、L I bは近代以降に堆積した宅地造成時の盛土である。

L I cは、暗褐色砂質土で、調査区の西縁のみで確認できる現表土である。

L IIは、黒褐色砂質土で、L I c同様、調査区の西縁のみで確認できる。層厚は14~28cmで、少量の遺物を含んでいる。

L IIIは、褐色砂質土で、調査区のほぼ全域に堆積する基礎層で、無遺物層でもある。(阿部)

### 第2節 土 坑

切付遺跡では、24基の土坑の調査を実施した。その内の16~18・22・25・27・28号土坑の7基について、近世末から近代に造られた裏込土を伴った土坑で、調査区の北東側に集中している。ま

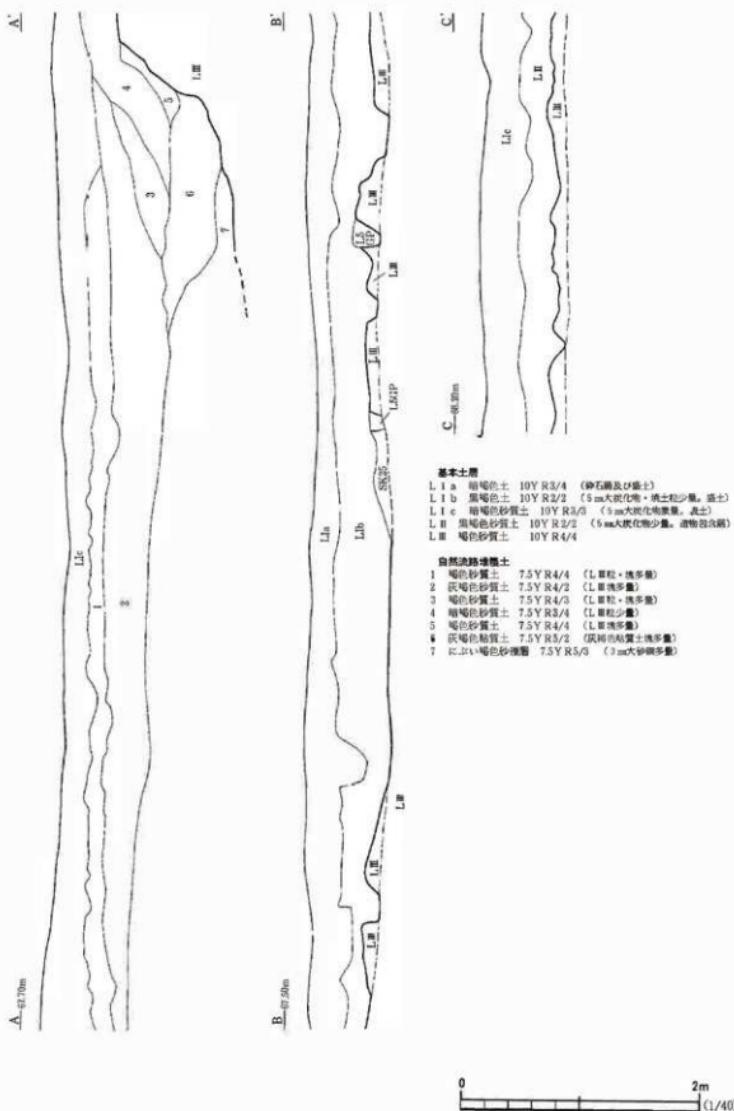


図3 基本土層

た、1・5・7～9・11・14・24号土坑の8基は落し穴状土坑で、主に調査区の西側で確認している。8基の落し穴状土坑の内、1・5・7・11・14・24号土坑の6基については長軸方向をほぼ同じくし掘り込まれている。残りの2基の土坑(SK 8・9)は、前述した6基と長軸方向を違えて造られている。

なお、調査の過程で土坑と認定できないことが確認できたものについては、欠番とした。欠番としたものは、19・21・23・26号土坑である。

#### 1号土坑 SK1(図4)

本遺構は、調査区北西側のG 6・7グリッドに位置し、L III上面で検出した。すぐ北西側にSK 2が隣接している。平面形は、上端・中端において隅丸長方形である。規模は、上端で138×76cm、中端で126×54cm、長軸の方位はN38°W、検出面からの深さは30cmである。底面はL III中に形成され、ほぼ平坦である。周壁は底面から急傾斜で立ち上がる。堆積土は、3層に分けられ、レンズ状の堆積状況が確認できたことから、自然堆積と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、土坑の規模・形態から落し穴状土坑と考えられる。時期については、出土遺物が無く特定が難しいが、周囲にある同形状の遺構から判断して縄文時代のものと考えられる。

#### 2号土坑 SK 2(図4)

本遺構は、調査区北西側のF・G 6グリッドに位置し、L III上面で検出した。すぐ南東側にSK 1が隣接している。平面形は梢円形である。規模は、長軸162cm、短軸102cm、検出面からの深さは42cmを測る。底面は南側の方が一段深くなり、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は、3層に分けられ、レンズ状の堆積状況が確認できたことから自然堆積と判断した。

遺物は、E 1から縄文土器片1点が出土しているが、細片のため図示していない。

本遺構は、底面に凹凸のある梢円形の土坑であることが確認されただけで、機能を特定することは難しい。時期については不明である。

#### 3号土坑 SK 3(図4、写真2)

本遺構は、調査区北西側のF 7グリッドに位置し、L III上面で検出した。南側にSK 5・6が隣接している。平面形は、上端で隅丸長方形、中端で円形である。規模は、上端で長軸123cm、短軸109cm、中端で直径約130cm、検出面からの深さは54cmを測る。底面はほぼ平坦である。周壁は、東西側でオーバーハングして立ち上がる。本来は周壁全体がオーバーハングしていた崩落してしまった可能性が考えられる。堆積土は2層に分けられ、E 1の黒褐色砂質土がオーバーハングしている奥まで厚く堆積することから、人為堆積と判断した。

遺物は、E 1から縄文土器片3点が出土したが、細片のため図示していない。

本遺構は、土坑の規模・形態から貯蔵穴と考えられる。時期については、出土遺物が少なく特定は難しいが、縄文時代と考えられる。

4号土坑 SK4(図4、写真2)

本遺構は、調査区北西側のG 6グリッドに位置し、L III上面で検出した。1~2mほど南西側にはSK1・2がある。平面形は楕円形で、規模は長軸154cm、短軸134cm、検出面からの深さは28cmを測る。底面には凹凸があり、北側の方が一段深くなっている。周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積状況が確認できたことから、自然堆積と判断した。

遺物は、#1から着磁性のある鉄滓小片3点(合計重量84g)が出土した。

本遺構は、底面に凹凸のある楕円形の土坑であることだけ確認できたが、機能を特定することは難しい。時期についても、出土遺物が少なく特定は難しいが、近世末から近代頃と考えられる。

5号土坑 SK5(図5・11、写真3)

本遺構は、調査区北西側のF 7グリッドに位置し、L III上面で検出した。すぐ北東側にSK3・6が隣接している。平面形については、上端が楕円形、中端・底面が隅丸長方形を呈する。規模は、上端で196×96cm、中端で176×68cm、長軸の方位はN58°W、検出面からの深さは74cmである。周壁は、底面から35~40cmまでほぼ垂直に立ち上がり、それより上位では崩落により傾斜が緩やかになっている。底面はL IV中に形成されており、その中央部に2個の小穴(#1・2)が設けられている。小穴の平面形は共に円形で、径21~28cm、底面からの深さ28~31cmである。堆積土は5層に分けられ、レンズ状の堆積状況や塗膜からの流れ込みを確認できることから、自然堆積と判断した。

遺物は、#1から縄文土器片1点が出土し、図11-1に示した。1は縄文時代早期後半の土器片で、内外面に条痕文を施し、胎土には纖維混和痕は認められなかった。

本遺構は、土坑の規模・形態から落し穴状土坑で、その底面に2個の小穴を伴う。時期については、出土遺物が少なく特定は難しいが、縄文時代早期後半頃と考えられる。

6号土坑 SK6(図5、写真2)

本遺構は、調査区北西側のF 7グリッドに位置し、L III上面で検出した。北西側にSK3が、南西側にSK5が隣接する。平面形は不整楕円形である。規模は、307×205cm、検出面からの深さは15cmである。底面はほぼ平坦で、周壁は急傾斜で立ち上がる。堆積土は黒色砂質土の単一層で、特に人為堆積土を示すような根柢は得られなかった。

遺物は、#1よりかわらけなどの素焼き陶器片3点が出土したが、細片のため図示していない。

本遺構は、底面を平坦に整えた不整楕円形の土坑であることだけ確認できたが、機能は不明である。時期については、出土遺物が少なく特定は難しいが、近世末から近代頃と考えられる。

7号土坑 SK7(図4・11、写真3)

本遺構は、調査区北西隅のD・E 8グリッドに位置し、L III上面で検出した。北東側1mほどの

ところにSK24がある。平面形については、上端が不整長方形、中端・底面が長方形を呈する。規模は、上端で $180\times106\text{cm}$ 、中端で $154\times66\text{cm}$ 、長軸の方位はN $61^{\circ}\text{W}$ 、検出面からの深さは $56\text{cm}$ である。底面はLⅢ中に形成されており、ほぼ平坦である。周壁は、底面から $40\sim50\text{cm}$ まではほぼ垂直に立ち上がり、それより上位では崩落のため緩やかな傾斜になる。堆積土は3層に分けられ、レンズ状の堆積状況が確認できることから、自然堆積と判断した。

遺物は、#1・3から縄文土器片3点、流紋岩製の剥片1点が出土した。そのうち2点の縄文土器片を図11-2・3に示した。2は縄文時代早期後半の土器片で、内面に条痕文を施している。3は縄文時代前期中葉の土器片で、外面に粘土輪積み痕が認められる。

本遺構は、土坑の規模・形態から落し穴状土坑と考えられる。時期については、出土遺物が少なく特定は難しいが、縄文時代前期中葉頃と考えられる。

#### 8号土坑 SK8(図5、写真3)

本遺構は、調査区南西側のF12グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。平面形については、上端が不整橿円形、中端と底面が長方形を呈する。規模は、上端で $228\times102\text{cm}$ 、中端で $216\times92\text{cm}$ 、長軸の方位はN $7^{\circ}\text{W}$ 、検出面からの深さは $110\text{cm}$ である。底面はLⅢ中に形成されており、ほぼ平坦である。周壁は、底面から $70\sim90\text{cm}$ まではほぼ垂直に立ち上がり、それより上位では崩落のため傾斜が緩やかになる。堆積土は4層に分けられ、レンズ状の堆積状況が認められることから、自然堆積と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、土坑の規模・形態から落し穴状土坑と考えられる。時期については、出土遺物は無すことから特定は難しいが、周囲にある同形状の遺構から判断して縄文時代と考えられる。

#### 9号土坑 SK9(図6、写真3)

本遺構は、調査区南西側のE12・13グリッドにまたがって位置し、LⅢ上面で検出した。平面形は、上端が不整橿円形、中端・底面が長方形である。規模は、上端で $240\times92\text{cm}$ 、中端で $178\times54\text{cm}$ 、長軸の方位はN $7^{\circ}\text{E}$ 、検出面からの深さは $98\text{cm}$ である。底面はLⅢ中に形成されており、ほぼ平坦である。周壁は、底面から $75\sim95\text{cm}$ まではほぼ垂直に立ち上がり、それより上位では崩落のため傾斜がやや緩やかになる。堆積土は6層に分けられ、壁際からの流れ込みやレンズ状の堆積状況を確認できることから自然堆積と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、土坑の規模・形態から落し穴状土坑と考えられる。時期については、出土遺物が無すことから特定は難しいが、周囲にある同形状の遺構から判断して縄文時代と考えられる。

#### 10号土坑 SK10(図5、写真2)

本遺構は、調査区南西端のD・E14グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。南側が調査区外に伸びているため、全容は不明であるため、半円形状の平面形を確認した。規模は、上端で長軸 $180$

#### 第4編 切付遺跡

cm、短軸50cm、中端で長軸122cm、検出面からの深さは36cmを測る。底面には凹凸が目立ち、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は5層に分けられ、 $\ell$  1～5すべてが黒味の強い土である。壁際からの流れ込みやレンズ状の堆積状況を確認できることから、自然堆積と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、底面に凹凸が目立つ円形状の土坑であることだけ確認できたが、機能・時期については不明である。

#### 11号土坑 SK11(図6・11、写真3)

本遺構は、調査区南西隅のD13・14グリッドに位置し、L III上面で検出した。南東側2.4mほどのところには、SK10がある。平面形は、上端が不整楕円形である。中端と底面は、一部を掘り過ぎて壊しているが、隅丸長方形だったと推測される。規模は、上端で284×90cm、中端で170以上×58cm、長軸の方位はN37°W、検出面からの深さは107cmである。底面はL III中に形成されており、ほぼ平坦である。周壁は、底面から70～80cmまではほぼ垂直に立ち上がり、それより上位では崩落のため傾斜がやや緩やかになる。堆積土は3層に分けられる。 $\ell$  1～3は周壁の崩落に起因するL III塊を含み、レンズ状の堆積状況が認められることから、自然堆積と判断した。

遺物は、 $\ell$  1から縄文土器片2点が出土した。このうち、1点の縄文土器片を図11-4に示した。4は縄文時代早期後半の土器片で、内外面に条痕を施している。

本遺構は、土坑の規模・形態から落穴状土坑と考えられる。時期については、出土遺物が少なく特定は難しいが、縄文時代早期後半頃と考えられる。

#### 12号土坑 SK12(図7)

本遺構は、調査区南西端のE14、F13・14グリッドに位置し、L III上面で検出した。南側半分が調査区外に伸びるため、全容は不明であるが、その中端は隅丸方形を呈する。規模は、上端で長軸360cm、調査区壁までの短軸150cm、中端で長軸250cm、調査区壁までの短軸110cm、検出面からの深さは85cmである。底面は、中央に向かって緩やかに傾斜している。周壁は、西側で緩やかになっているものの、急傾斜で立ち上がる。堆積土は9層に分けられ、基本的にすべての層が混入物の目立つ黒味の強い土である。 $\ell$  2・3・7の堆積状況が不自然であることから、人為堆積土の可能性がある。

遺物は、 $\ell$  1から着磁性のある鉄滓小片5点(合計重量64g)が出土した。

本遺構は、隅丸方形の土坑であることだけ確認できたが、機能を特定することは難しい。時期についても、出土遺物が少なく特定は難しいが、近世末から近代頃と考えられる。

#### 13号土坑 SK13(図7・11、写真2)

本遺構は、調査区南側のI11グリッドに位置し、L III上面で検出した。平面形は楕円形である。

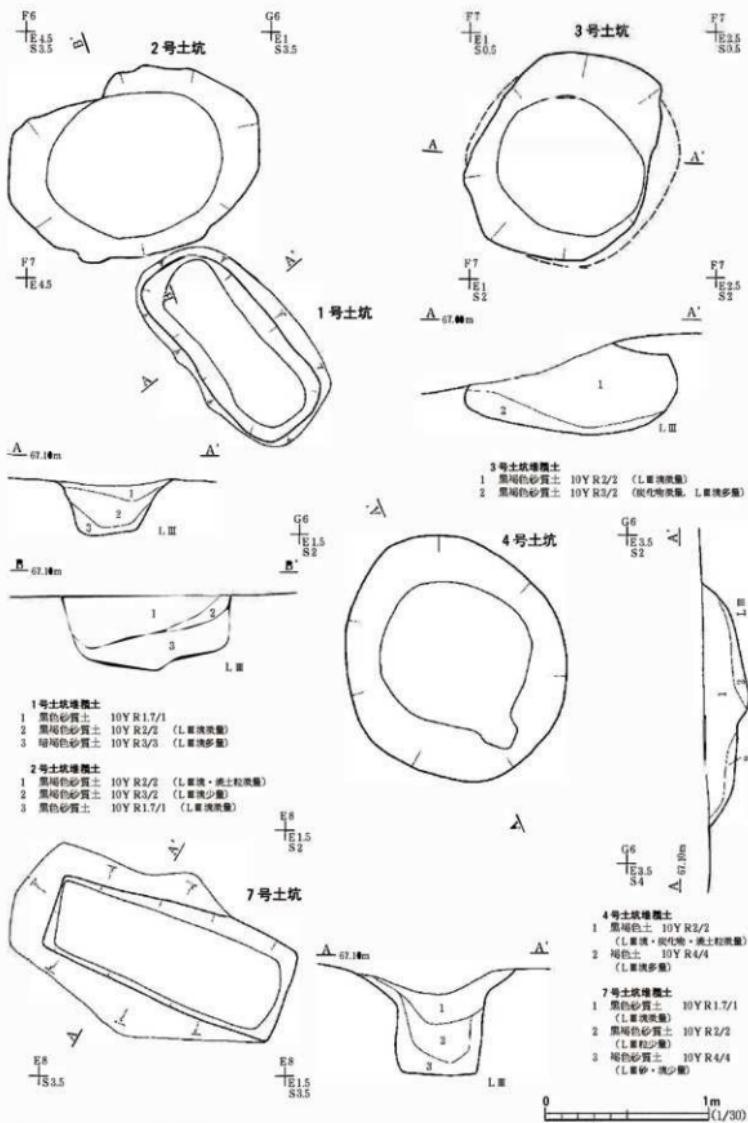


図4 1~4・7号土坑

第4編 切付遺跡

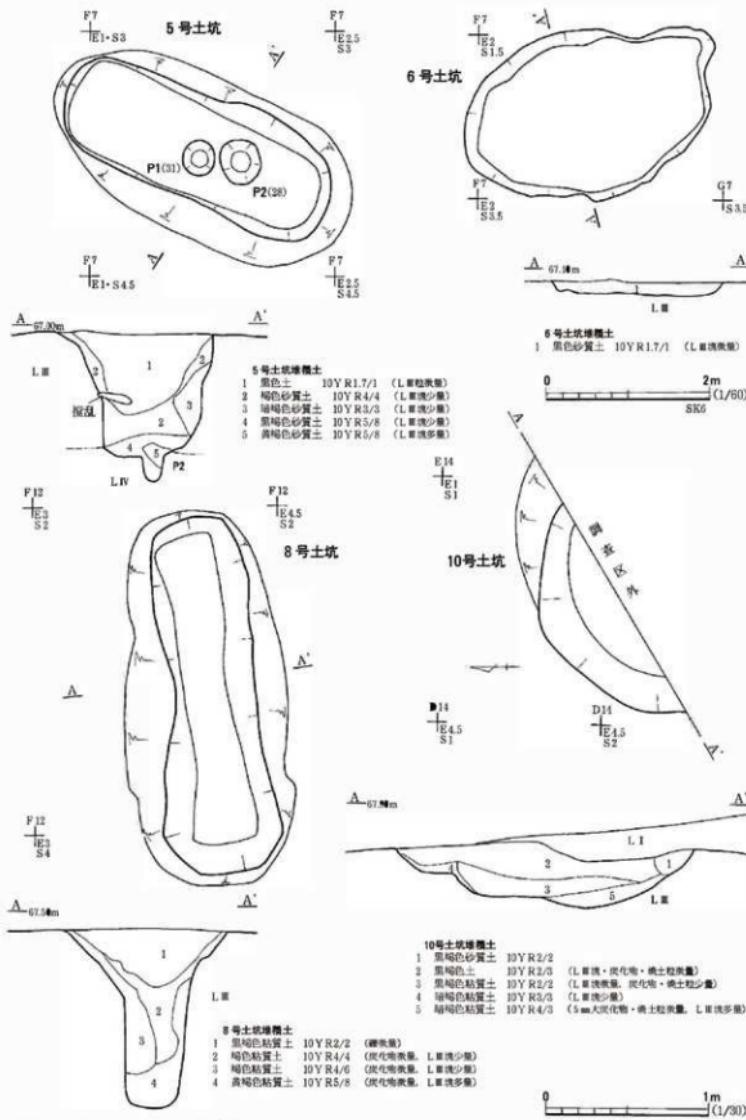


図5 5・6・8・10号土坑

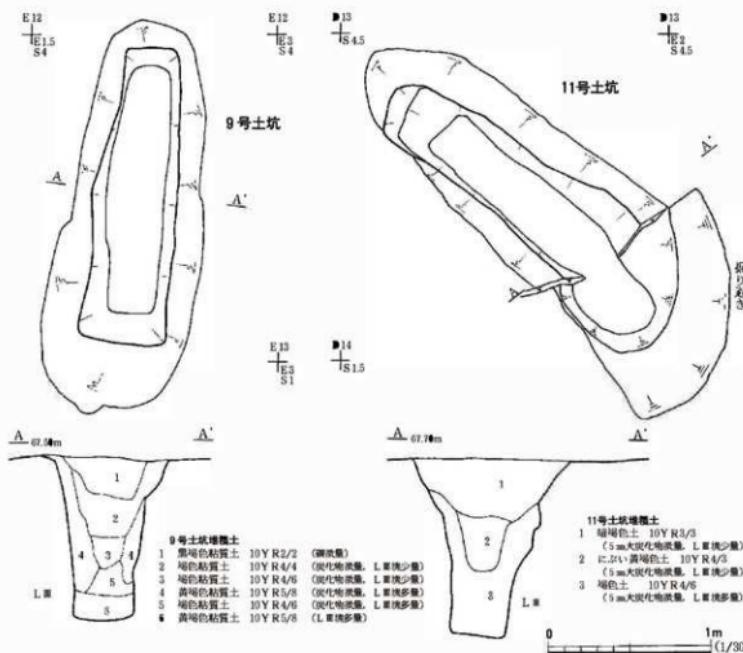


図6 9・11号土坑

規模は $257 \times 195\text{cm}$ 、検出面からの深さは30cmを測る。底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分かれ、レンズ状の堆積状況を確認できることから、自然堆積と判断した。

遺物は、 $\ell 1$ から縄文土器片4点、かわらけ片7点、大堀相馬産の端反腕片などの陶磁器小片7点、鉄製品1点、銅製品1点が出土した。このうち、1点の陶磁器片と1点の銅製品を図11-5・14に示した。5は大堀相馬産の碗で内外面に灰釉を施し、底面には「イ」と見られる字が焼成前に刻まれている。14は銅製の焼印で、柄の部分は欠損している。

本遺構は、楕円形の土坑であることだけ確認できたが、機能を特定することは難しい。時期については、出土遺物から近世末から近代頃と考えられる。

#### 14号土坑 SK14(図8, 写真3)

本遺構は、調査区西端のD・E10グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。平面形は、上端が楕円形、中端・底面が隅丸長方形である。規模は、上端で $204 \times 130\text{cm}$ 、中端で $160 \times 78\text{cm}$ 、長軸の方はN $57^\circ$ W、検出面からの深さは110cmである。周壁は、底面から35~70cmまでほぼ垂直に立ち上

#### 第4編 切付遺跡

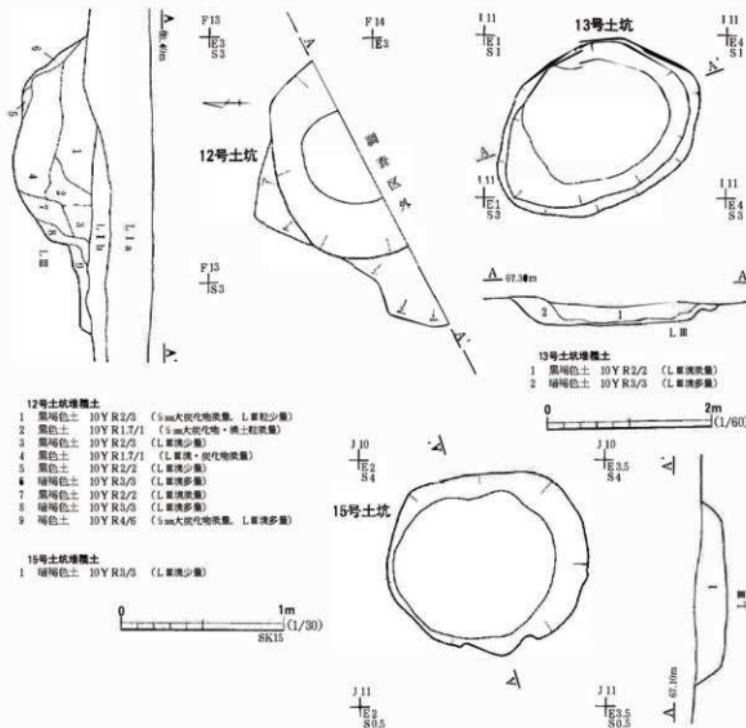


図7 12・13・15号土坑

がり、それより上位では崩落のためやや緩やかな傾斜となる。底面はLⅢ中に形成されており、その中央には小穴1個(P1)を掘り込んでいる。P1の平面形は楕円形で、規模は16×12cm、底面からの深さ31cmである。堆積土は5層に分けられる。壁際からの流れ込みやレンズ状の堆積状況を確認できることから、自然堆積と判断した。

遺物は、E1から縄文土器片4点が出土した。土器は細片または磨耗が著しいため、図示していない。器面の磨耗した土器片を観察すると、胎土中には纖維混和痕が認められる。

本遺構は、土坑の規模・形態から落し穴状土坑と考えられる。時期については、出土遺物から縄文時代早期から前期と考えられる。

#### 15号土坑 SK15(図7・11、写真4)

本遺構は、調査区南側のJ10・11グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。平面形は不整楕円形

である。規模は長軸124cm、短軸110cm、検出面からの深さは20cmを測る。底面はほぼ平坦で、周壁は急傾斜で立ち上がる。堆積土は暗褐色土の単一層で、特に人為堆積土を示すような根拠は得られなかった。

遺物は、 $\ell 1$ よりかわらけ片2点、陶器片1点が出土した。このうち、1点を図11-6に示した。 $\ell 6$ は口縁部の一部を欠損したかわらけで、底面に回転糸切り痕が明瞭に残っている。口縁部の一部に、焼けた部分が認められることから、灯明皿として使用されたものである。

本遺構は、浅い不整梢円形の土坑であることだけは確認できたが、機能を特定することは難しい。時期については、出土遺物から、近世以降と考えられる。

#### 16号土坑 SK16(図8、写真4)

本遺構は、調査区北東側のL6グリッドに位置し、L3上面で検出した。SK28と重複し、本遺構が新しい。堆積土は6層に分けられ、 $\ell 1 \sim 5$ は廃絶後の堆積土で、全体的に木炭または細かい炭化物を多く含んでいる。 $\ell 1 \sim 3$ の土質は粘性が強いため、意図的に埋め戻された人為堆積土の可能性が考えられる。 $\ell 6$ は、粘質土塊を多く含んだ褐色粘質土で、層厚18~26cmで本遺構の周壁全体を覆っている。 $\ell 1 \sim 5$ を取り除いた状態での平面形は、上端で梢円形、底面で円形を呈する。規模は、上端で142×126cm、底面で直径100cm、検出面からの深さは42cmである。周壁は、底面から20~26cmほどの高さまでは垂直に立ち上がり、それより上位では緩い傾斜となっている。底面は平坦に造られ、その縁辺には浅い溝を $\ell 6$ に沿って造られている。底面の溝の規模は、幅10~26cm、深さ4cmである。底面縁辺の溝と周壁の状況を考え合わせると、 $\ell 1 \sim 5$ を除去した後の壁際には、板材がはめこまれていた可能性が高い。裏込土( $\ell 6$ )を取り除いた後の掘形の形状は、187×166cmの梢円形である。

遺物は、 $\ell 1$ から砥石片3点、 $\ell 1$ から鉄製小片1点、 $\ell 6$ から大堀相馬産の碗と土瓶細片4点が出土した。いずれも、細片のため図示していない。また、底面からは、大きさ12~24cmほどの焼けた花崗岩礫10点を確認した。 $\ell 4$ に堆積した木炭片については、一部を採取し樹種同定を実施した結果、モクレン属(ホオノキ・コブシなど)という結果が示された(付編2参照)。

本遺構は、周壁に沿って板材をはめ込み、その背後に裏込土を充填した土坑である。機能については、粘性の強い裏込土を充填し、その周壁に沿って板材をはめ込んでいた状況から、貯水用の穴であったと考えている。時期については、重複関係からSK28よりは新しく、出土遺物から近代と考えられる。また、 $\ell 4$ から出土したモクレン属の木炭片については、放射性炭素の年代測定を併せて実施したところ「110±30yrBP」という年代が示された(付編1参照)。

#### 17号土坑 SK17(図8・11、写真4)

本遺構は、調査区北東側のK5・6、L5・6グリッドに位置し、L3上面で検出した。SK20・22と重複し、本遺構が新しい。堆積土は6層に分けられ、 $\ell 1 \sim 4$ は廃絶後の堆積土で、全体的に

#### 第4編 切付遺跡

炭化物を多く含んでいる。L3・4は周壁の崩落と考えられ、L1・2の土質は粘性が強いため、意図的に埋め戻された人為堆積土の可能性が高い。L5・6は、いずれも本遺構の周壁を覆っている裏込土である。L5は灰白色粘質土で、層厚8cmほどである。L5の外周を覆うL6は黒褐色粘質土で、層厚15~46cmである。L1~4を取り除いた状態での平面形は、上端・底面ともに円形である。規模は、上端で直径約50cm、底面で直径50cm、検出面からの深さは26cmである。底面は平坦に造られ、周壁はほぼ垂直に立ち上がる。裏込土(L5・6)を取り除いた後の掘形の形状は、187×138cmの不整梢円形である。

遺物は、L1から縄文土器片1点、かわらけ片3点、陶器片5点、鉄製品片1点、L6から陶器器片8点が出土した。このうち、1点を図11-7に示した。7は肥前産の磁器の染付碗で、器面に梅樹文を描いている。この他に出土した大堀相馬産の陶器細片の器種は、灰釉・鉄釉碗、擂鉢などが含まれている。

本遺構は、規模・形状そして裏込土から判断すると、SK16と同様、周壁に沿って板材をはめ込み、その背後に裏込土を充填した貯水用の穴跡と考えられる。時期については、出土遺物からSK16同様に19世紀頃と考えられる。

#### 18号土坑 SK18(図9・11、写真4)

本遺構は、調査区北東側のL5グリッドに位置し、L3上面で検出した。2mほど東側にはSK25が、南西側にはSK17・22がある。堆積土は6層に分けられ、L1~5は廃絶後の堆積土である。炭化物やL3塊といった混入物が多く含まれている。L1~5の土質はいずれも粘性が強いため、意図的に埋め戻された人為堆積土の可能性が考えられる。L6は、粘質土塊を多量に含んだ黄褐色の裏込土で、層厚12~32cmほどで本遺構の周壁全体を覆っている。L1~5を取り除いた状態での平面形は、上端・底面とともに梢円形である。規模は、上端で130×102cm、底面で108×78cm、検出面からの深さは50cmである。周壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦に造られ、その辺には浅い溝をL6に沿って造らせている。底面の溝の規模は、幅10cm、深さ4cmである。底面辺の溝と周壁の状況を考え合わせると、L1~5を除去した後の内部には、壁際に沿って板材をはめ込んでいた可能性が高い。裏込土(L6)を取り除いた後の掘形の形状は、184×128cmの不整梢円形である。

遺物は、L1・5から大堀相馬産の陶器片22点、砥石1点、鉄製小片5点が、L6から大堀相馬産の陶器片1点が出土した。このうち、2点を図11-9・16に示した。また、底面からは、大きさ10~18cmほどで、表面の煤けた花崗岩礫6点を確認した。9は大堀相馬産の徳利の肩部片で、16は粘板岩製の砥石である。

本遺構は、規模・形状、裏込土と底面縁を造る溝の状況から判断して、SK16と同様に周壁に沿って板材をはめ込み、その背後に裏込土を充填した貯水用の穴跡と考えられる。時期については、出土遺物からSK16同様に19世紀頃と考えられる。

## 20号土坑 SK20(図10・11、写真4)

本遺構は、調査区北東側のK 5・6グリッドに位置し、SK17・22底面で検出した。SK17・22と重複し、本遺構が最も古い。平面形は不整橿円形である。規模は、上端で126×118cm、底面で108×86cm、検出面からの深さは18cmである。周壁は、東壁ではほぼ垂直に立ち上がり、西壁でやや傾斜が緩くなる。堆積土は2層に分けられ、L1の土質は粘性が強いため、意図的に埋め戻された人為堆積土の可能性が考えられる。

遺物は、L1・2から陶器・かわらけ片など計5点が出土した。このうち1点の陶器を図11-12に示した。12は、家紋に見られる揚羽蝶を模して作った型押し皿である。内外面には青緑色釉が塗られ、底面に布目圧痕が認められる。

本遺構については、SK17・22よりも古い不整橿円形の土坑ということだけ確認できた。本遺構は重複遺構によって著しく壊されているが、規模から推測すると、本来の形状はSK17・22と同様に、貯水用として利用された穴であった可能性が高い。時期については、出土遺物から19世紀頃と考えられる。

## 22号土坑 SK22(図9・11、写真4)

本遺構は、調査区北東側のK 5グリッドに位置し、L3上面で検出した。SK17・20・27と重複し、SK20・27より新しく、SK17より本遺構が古い。そのため、本遺構の南側の一部は、SK17によって壊されている。堆積土は8層に分けられ、L1～5は廃絶後の堆積土である。全体的に炭化物やL7に起因する粘質土塊などの混入物を多く含む。L1～5の土質は粘性が強いため、意図的に埋め戻された人為堆積土の可能性が考えられる。L6～8は、いずれも本遺構の周壁を覆っている裏込土である。L6は、層厚6cmの黄褐色粘質土である。L6の外周を覆うL7・8は層厚25～104cmほどの黒色系の粘質土である。L1～5を取り除いた状態での平面形は、上端で橿円形、底面で円形を呈する。規模は、長軸104×80cmの橿円形を呈し、底面で直径80cm、検出面からの深さは35cmである。底面は概ね平坦に造られ、周壁は垂直に立ち上がる。裏込土(L6～8)を取り除いた後の掘形の形状は、206以上×112cmの不整橿円形を呈していたと考えられる。

遺物は、L1・3よりかわらけ片1点、大堀相馬産の陶器片14点、鉄製小片5点が出土した。このうち、2点の陶器を図11-8・13に示した。8・13はいずれも大堀相馬産の青土瓶の蓋と注ぎ口部の破片である。この他に出土した大堀相馬産の陶器細片の器種は、大きさの異なる灰釉碗片である。

本遺構は、規模・形状そして裏込土で充填された状況から判断してSK16と同様、貯水用の穴跡である。時期については、出土遺物から19世紀頃と考えられる。

## 24号土坑 SK24(図9、写真4)

本遺構は、調査区北西隅のE 8グリッドに位置し、L III上面で検出した。南西側1mほどのところにはSK 7がある。平面形は、上端が隅丸方形、底面が楕円形である。規模は、124×64cm、長軸の方位はN60°W、検出面からの深さは40cmである。周壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面はL III中に形成されており、その中央部に1個の小穴(P 1)が設けられている。小穴の平面形は楕円形で、22×14cm、底面からの深さ28cmである。堆積土は5層に分けられる。壁際からの流れ込みを確認できることから、自然堆積と判断した。本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構は、土坑の規模・形態から落し穴状土坑で、その底面に1個の小穴を伴う。時期については、出土遺物が無く特定は難しいが、SK 5などの遺構との関連から、縄文時代と考えられる。

## 25号土坑 SK25(図9、写真4)

本遺構は、調査区北東側のL 5グリッドに位置し、L III上面で検出した。堆積土は2層に分けられ、ℓ 1は廃絶後のL III塊をわずかに含む黒色土で、人為堆積土とする知見は、特に得られなかつた。ℓ 2は、炭化物など微量に含む褐色粘質土で、層厚8~12cmで本遺構の周壁全体を覆っている。ℓ 1を取り除いた状態での平面形は、上端・底面ともに円形を呈する。規模は、上端で直径100cm、底面で直径80cm、検出面からの深さは22cmである。周壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦に造られ、その縁辺には浅い溝をℓ 2に沿って巡らせてある。底面の溝の規模は、幅6~14cm、深さ5cmである。裏込土(ℓ 2)を取り除いた後の掘形の形状は、直径約120cmの円形を呈する。

遺物は、ℓ 1から大堀相馬産の碗や土瓶片8点、鉄製小片2点が出土した。いずれも、細片のため図示していない。

本遺構は、規模・形状、裏込土と底面縁を巡る溝の状況から判断して、周壁に沿って板材をはめ込み、その背後に裏込土を充填した貯水用の穴跡と考えられる。時期については、出土遺物から19世紀頃と考えられる。

## 27号土坑 SK27(図10・11、写真5)

本遺構は、調査区北東側のK 5グリッドに位置し、L III上面で検出した。SK 22と重複し、本遺構が古い。堆積土は3層に分けられ、ℓ 1は廃絶後の堆積土である。ℓ 1の土質は粘性が強いため、意図的に埋め戻された人為堆積土の可能性が考えられる。ℓ 2は、底面に貼られた土で、本遺構開口時にはℓ 2上面が底面になっていたと考えられる。ℓ 3は、粘質土塊を多く含んだ褐色の裏込土で、層厚22~55cmで本遺構の周壁全体を覆っている。ℓ 1を取り除いた状態での平面形は、上端・底面ともに円形を呈する。上端の規模は、SK 22に南側を壊されているが108×94cm、底面は82×82cm、検出面からの深さは26cmである。周壁は垂直に立ち上がる。底面にはℓ 2を貼り少し湾曲気味に造られ、その縁辺には浅い溝をℓ 3に沿って巡らせてある。底面の溝の規模は、幅4cm、深さ

4 cmである。底面縁辺の溝と周壁の状況を考え合わせると、幅の狭い溝には板材がはめ込まれていた可能性が高い。裏込土(ℓ 3)を取り除いた後の掘形の形状は、170×138cmの不整楕円形である。

図10左下の土層断面を見ると、本遺構の構造順序が分かる。まず、掘形を造り、内部に粘質土(ℓ 2)を積み凹面鏡状に成形する。成形したℓ 2の外縁には、板材を垂直に立て、板材同士を固定する作業と併行して、板材の背後には裏込土(ℓ 3)を充填していくといった工程が考えられる。

遺物は、ℓ 1・2よりかわらけ片2点、ℓ 1～3から大堀相馬産の灰釉碗・皿片など13点が出土した。このうち、2点を図11-10・15に示した。10は、大堀相馬産の灯明皿で、内外には鉄軸が塗られている。15は大振りのかわらけ底部片で、底面には糸切り痕が明瞭に残っている。

本遺構は、規模・形状、凹面鏡状に貼土をした底面そして底面縁を巡る溝の状況から判断して、SK16と同様に周壁に沿って板材をはめ込み、その背後に裏込土を充填した貯水用の穴と考えられる。時期については、重複関係からSK22よりは新しく、出土遺物から判断して19世紀頃と考えられる。

#### 28号土坑 SK28(図10・11、写真5)

本遺構は、調査区北東側のL 6グリッドに位置し、L III上面で検出した。SK16と重複し、本遺構が古い。本遺構の平面形は楕円形である。規模は、上端で128×110cm、底面で104×82cm、検出面からの深さは40cmである。周壁は急傾斜で立ち上がる。底面は平坦に造られ、その縁辺には浅い溝を巡らせている。底面の溝の規模は、幅4～22cm、深さ4cmである。堆積土は2層に分けられる。ℓ 1・2ともに廃絶後の堆積土である。ℓ 2の粘性が強いため、意図的に埋め戻された人為堆積土の可能性が考えられる。

遺物は、ℓ 1から大堀相馬産の陶器片3点、鉄製小片1点が出土した。このうち、1点を図11-11に示した。11は大堀相馬産の陶器製の卸し板の破片で、裏面には布目圧痕が見られる。

本遺構には掘形と裏込土を確認できなかったが、その規模・形状、底面縁の溝と周壁の状況から判断して、重複したSK16と同様に、周壁に沿って板材をはめ込み、その背後に裏込土を充填した貯水用の穴跡と考えられる。時期については、重複関係からSK16よりは古く、出土遺物から判断して19世紀頃と考えられる。

(今野・阿部)

### 第3節 柱列跡

切付遺跡では、3基の柱列跡の調査を実施した。これらは調査区の北東側にあり、3基の柱列跡の周囲には小穴群が集まっている。

第4編 切付遺跡

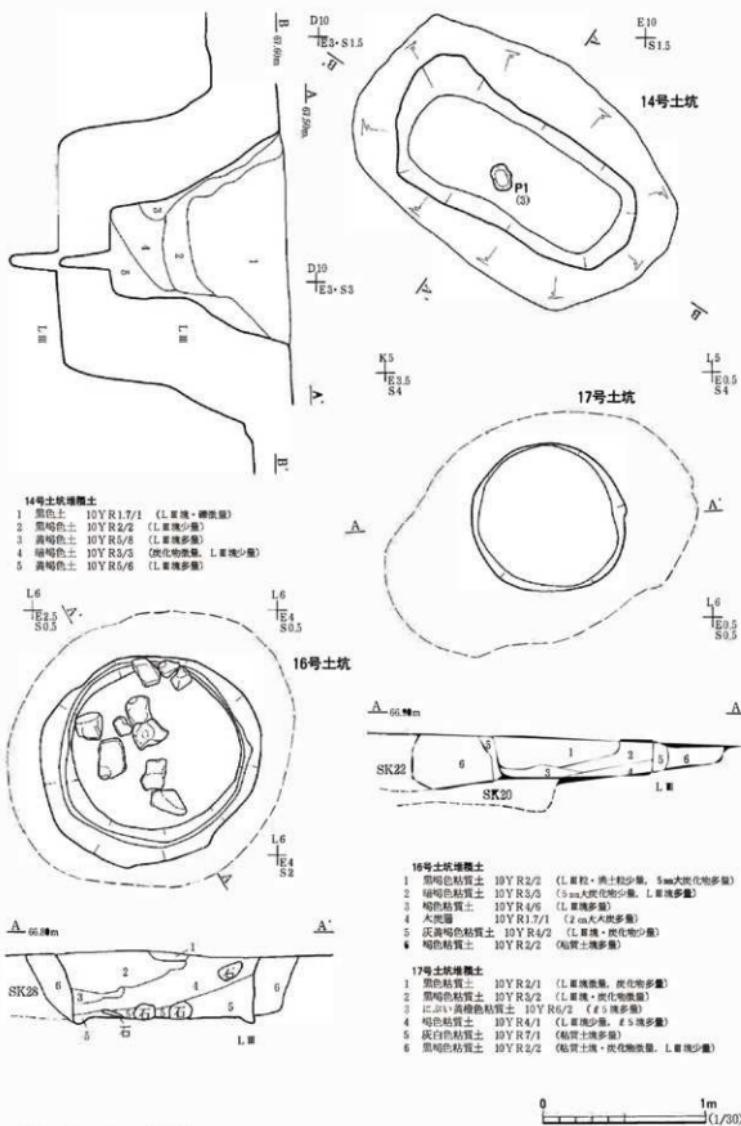


図8 14・16・17号土坑

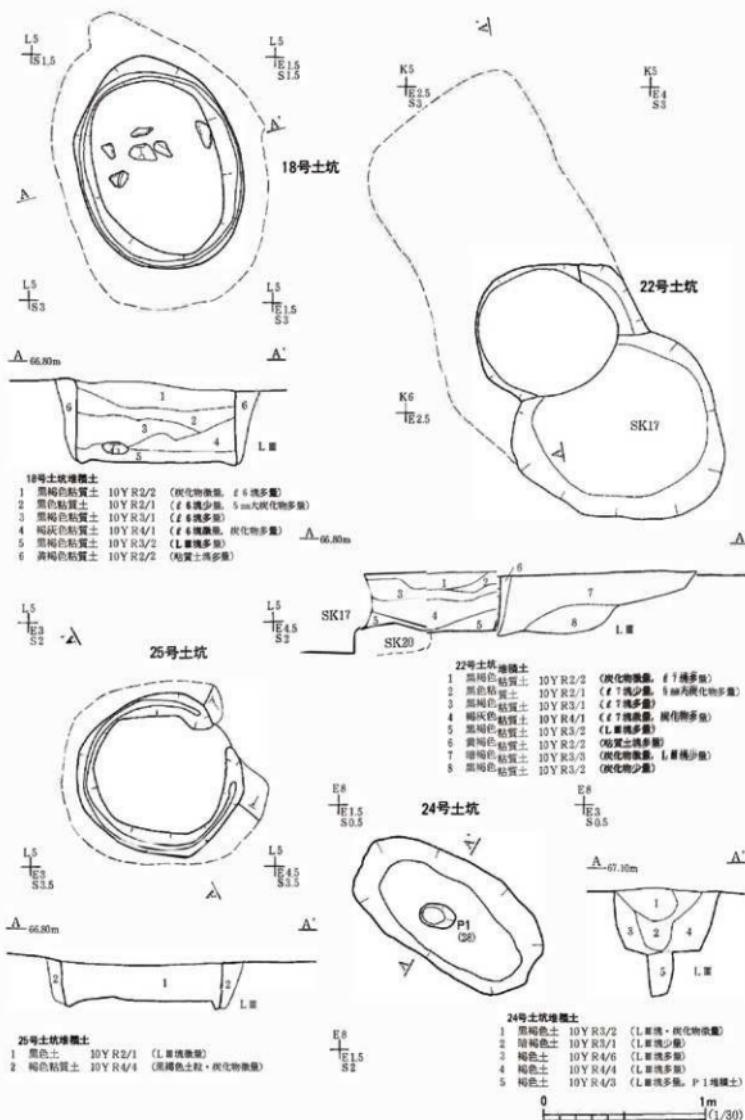


图 9 18·22·24·25号土坑

第4編 切付遺跡

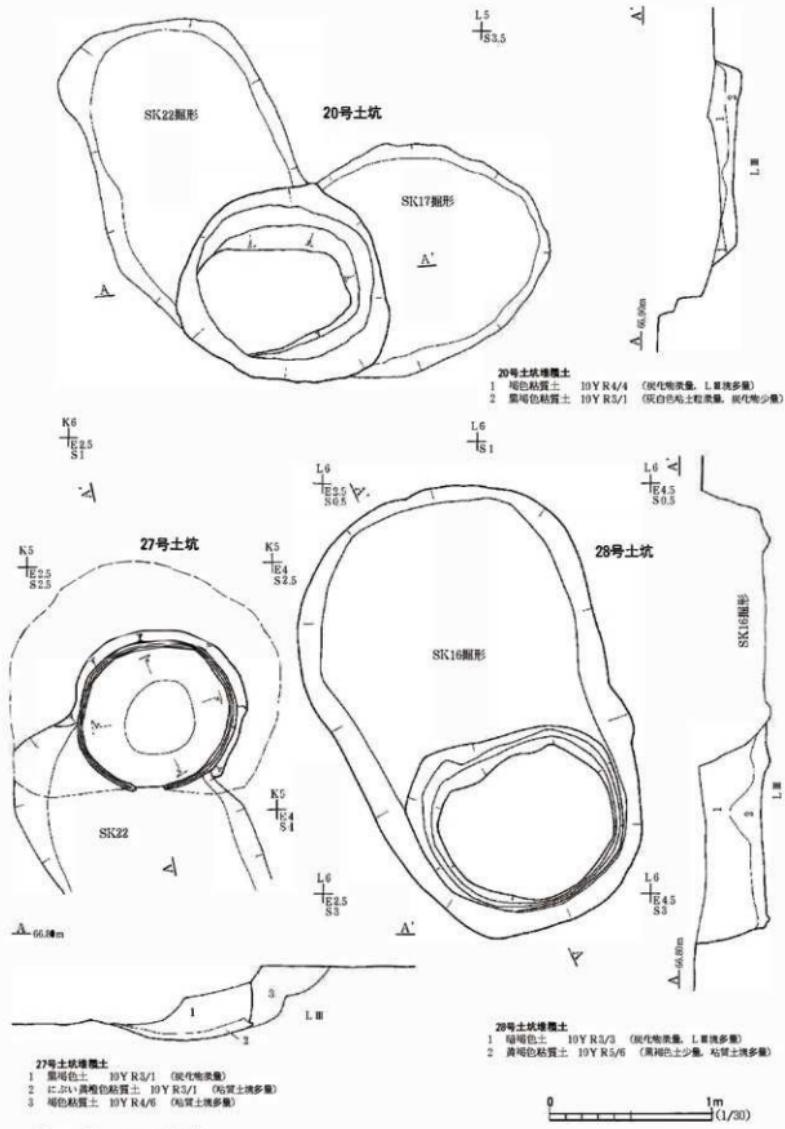


図10 20・27・28土坑

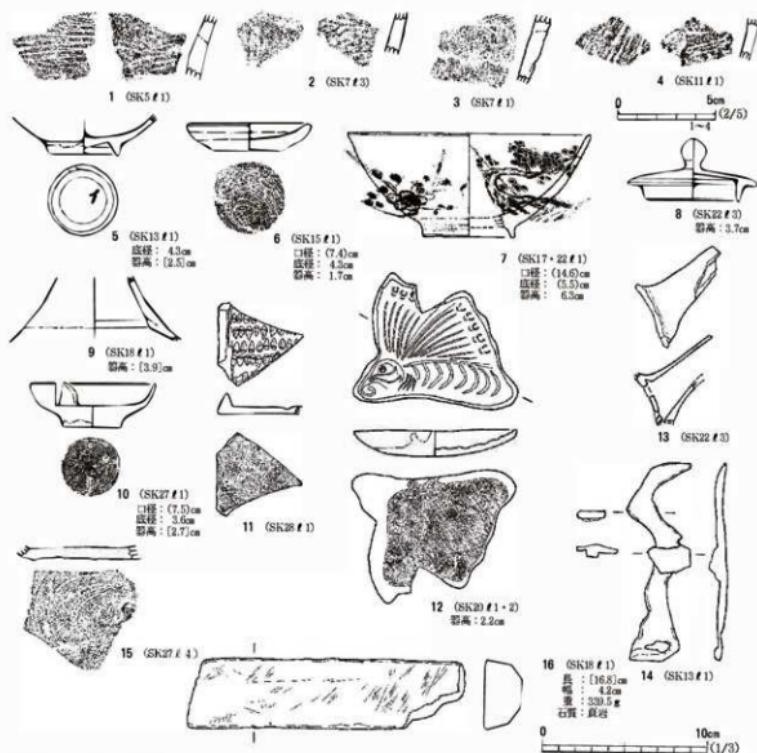


図11 土坑出土遺物

## 1号柱列跡 SA 1 (図12)

本遺構は、調査区北東側のJ・K 5 グリッドに位置し、L III上面で検出した。本遺構は東西2間の柱列跡で、長軸方向はN53°Eである。各柱間距離は掘形の中心で138~229cmである。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径30~40cm、検出面からの深さは14~22cmである。堆積土は、基本的にL III粒・塊を含む、黒味の強い褐色系の土である。遺物は、P 1のℓ 2から鉄石英の石核1点が出土したが、図示していない。本遺構は東西2間の柱列跡である。時期については、特定が難しいが、周囲の遺構との関連から19世紀頃と考えられる。

## 2号柱列跡 SA 2 (図12)

本遺構は、調査区北東側のJ・K 6 グリッドに位置し、L III上面で検出した。すぐ南側にSA 3

#### 第4編 切付遺跡

が隣接し、西に1mほどのところにはSK20・22がある。本遺構は東西3間の柱列跡で、長軸方向はN62°Eである。各柱間距離は、掘形の中心で114~120cmである。柱穴の平面形は、円形または梢円形を呈し、規模は長軸20~40cm、検出面からの深さは18~44cmである。堆積土は、基本的にLIII粒・塊を含む、黒味の強い褐色系の土である。P2~4は1層である。P1には、直径8cmの柱痕が認められる。

遺物は、P3から大堀相馬産の陶器碗片2点が出土したが、細片のため図示していない。

本遺構は、東西3間の柱列跡である。時期については、特定が難しいが、周囲の遺構との関連から19世紀頃と考えられる。

#### 3号柱列跡 SA3(図12)

本遺構は、調査区北東側のJ6グリッドに位置し、LIII上面で検出した。すぐ北側にSA2が隣接する。本遺構は南北2間の柱列跡で、長軸方向はN26°Wである。各柱間距離は107~137cmである。柱穴の平面形は円形で、規模は直径18~24cm、検出面からの深さは14~34cmである。堆積土は、基本的にLIII粒を含む、黒味の強い褐色系の土である。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、南北2間の柱列跡である。時期については、特定が難しいが、周囲の遺構との関連から19世紀頃と考えられる

(今野)

### 第4節 溝跡

切付遺跡では、1条の溝跡の調査を実施した。溝跡は調査区の北西側にあり、調査区の北側を流れる笠置川まで続く自然流路と考えられる。

#### 1号溝跡 SD1(図10・11、写真5)

本遺構は、調査区北東側のE~G7~9グリッドに位置し、LIII上面で検出した。本溝跡は、南西から北東に向かって延び、北側の笠置川へ合流していたと考えられる。溝跡の平面形は、調査てきたのが溝跡の一部分であったため不明である。確認できた規模は、長さは調査区の北壁から西壁まで約15m、幅は上端から調査区西壁まで最大6m、検出面からの深さは20cmである。周壁は急傾斜で立ち上がる。底面はLIII中に形成されている。堆積土は7層に分けられ、L6は粘質土、L7は粒径5mmの大礫を多く含んだ砂礫層である。いずれも、レンズ状の堆積状況が認められることから自然堆積と判断した。

遺物は、L1~2縄文土器片47点、大堀相馬産の陶器片1点が出土した。このうち、10点を図13に示した。1~3は、縄文時代早期後半の深鉢の胴部片で、内外面に貝殻条痕文を施している。4~6は、縄文時代前期前葉の大木1式土器で、外面上に斜行縄文を施し、胎土に纖維混和痕が見られる。7~8は、縄文時代晩期中葉の大洞C2式に比定される精製土器片である。9は、弥生土器の

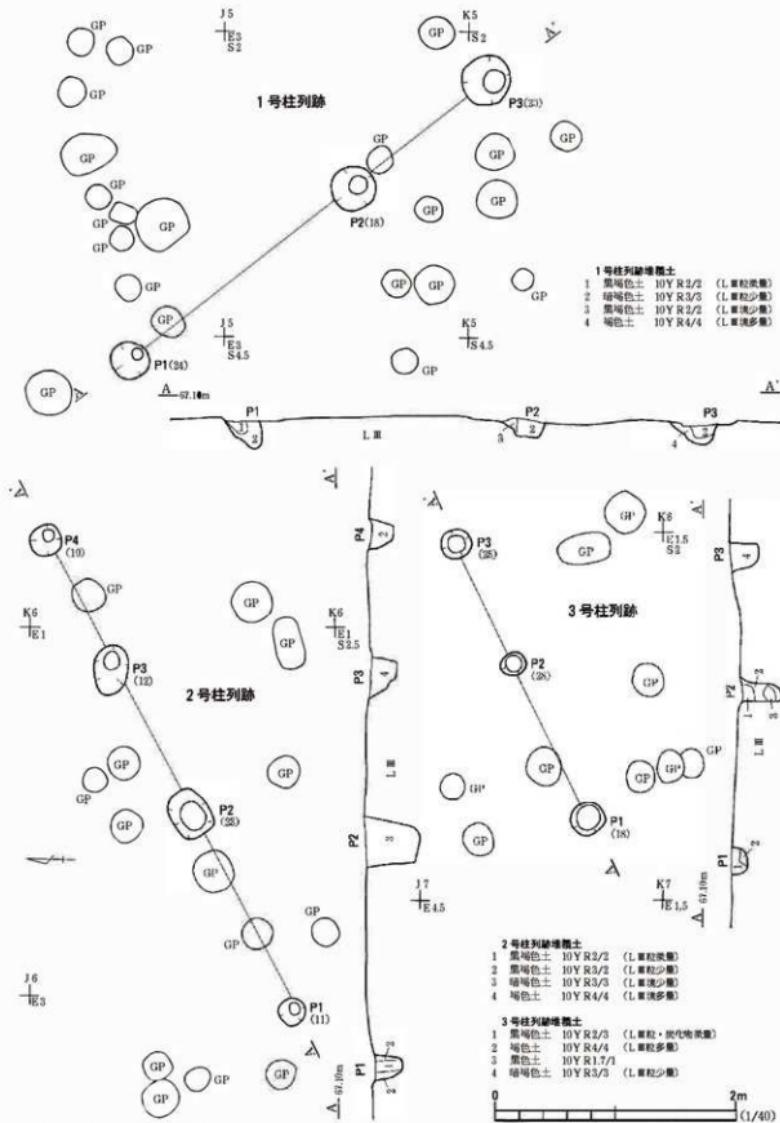


図12 1～3号柱列跡

#### 第4編 切付遺跡

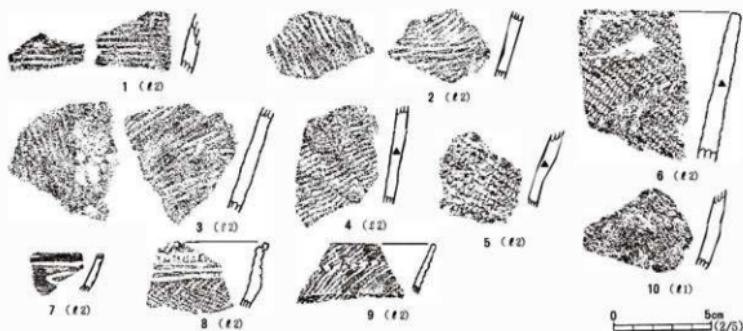


図13 1号溝跡出土遺物

口縁部片で、外面に撚糸圧痕文を施している。10は、内外面に擦痕を施した縄文土器片である。

本溝跡は、北側の笹部川へ流れ込む自然流路と考えられる。本溝跡は、 $\ell 2$ が堆積する以前では、浅いくぼみ状を呈して、南西方向から笹部川に向かって延びていたと考えられる。本溝跡の埋没時期については、 $\ell 2$ の出土遺物に大堀相馬産の陶器片が含まれていたことから推測すると、19世紀頃には、 $\ell 1 \cdot 2$ の流れ込みによって本溝跡は埋没したと考えられる。

また、本溝跡の延伸部分についての調査は、今回の発掘調査前に実施された常磐自動車道の橋脚建設工事に伴う掘削範囲と重複することから断念した。

(阿 部)

#### 第5節 小穴群

切付遺跡では、479個の小穴群の調査を実施した。これらの小穴は、調査区東側および北側に集中している。図14・15中では、小穴内の堆積土の土色と土質を「A～E」のアルファベットで、小穴から出土した遺物の種類を「1～6」の算用数字で表し、両者を組み合わせて各小穴脇に示した。小穴の深さについては、それぞれ括弧内に「cm」で示した。

##### 小穴群 GP (図14・15, 写真5)

合計479個の小穴は、すべてL III上面で検出した。分布状況をみると、調査区北側のSD 1の東側(15, F～I 6・7の計7グリッド内)、調査区東側(K・L 4, J～M 5～11, N 7～10の計34グリッド内)に集中する箇所が認められる。調査区東側のものについては、3基の柱列跡(S A 1～3)と、8基の土坑(S K 16～18・20・22・25・27・28)の周辺に分布することから、これらと関連する可能性が考えられる。

小穴の平面形は、円形、楕円形、そして僅かに方形を呈するものがある。規模は、直径または長軸16～44cmで、方形のものは一辺16～22cmである。検出面からの深さは、円形または楕円形のもの

で7~55cm、方形のもので10~54cmである。小穴内堆積土は、5種類に分けられ、略号「■」とした褐色土以外の4種は暗色系の土である。小穴同士または土坑との重複は少なかった。

小穴内出土の遺物は、縄文土器片3点、大堀相馬焼8点、かわらけ片2点、瓦片1点、石器(剥片)2点、銀治津および鉄製小片2点である。そのうち、3点の遺物を図14-1、図15-1・2に示した。図14-1は珪質頁岩製の剥片である。図15-1は素焼きのかわらけ片で、底面には回転系切り痕が明瞭に残っている。同図1の内面には、焼けた部分が認められることから、灯明皿として使用されたものである。図15-2は鉄を精錬する際に生じた不純物の塊形滓である。

小穴群は、発掘調査前に建てられていた民家に伴う柱穴群である。しかし、3基の柱列跡以外に、建物跡として認識できる柱穴を捉えられなかった。時期については、出土遺物が少なく特定は難しいが、特に調査区東側に分布する掘形を伴う土坑と、柱列跡との関連も併せて判断して19世紀頃と考えられる。

また、調査区東側および北側の延伸部分については、宅地造成による掘削深度が深く遺存状況が悪いこと、そして今回の発掘調査前に実施された常磐自動車道の橋脚建設工事に伴う掘削範囲と重複することから小穴の追認調査を断念した。

(阿部)

## 第6節 遺構外出土遺物

切付遺跡では、笠置川南岸の平坦面上に堆積した黒褐色砂質土(L II)中から少量の縄文土器と弥生土器が、基盤層である褐色砂質土(L III)のほぼ全域覆った盛土(L I)なかからも旧石器、縄文土器、弥生土器、陶磁器、羽口、鉄滓などが出土した。遺構外からの出土遺物については、一辺5mのグリッドごとに取り上げ、遺物には出土層位と併せてグリッド番号も付した。

### 遺物の出土状態

平坦面上に堆積した黒色砂質土(L II)の堆積範囲は、宅地造成による掘削を免れた調査区西端で確認できた。層の厚さは14~28cmである。L II中からは、縄文・弥生土器片21点、剥片3点が出土した。盛土を含んだ表土(L I)から出土した遺物は、縄文土器片32点、弥生土器片8点、陶磁器片24点、羽口片1点、石器2点、そして着磁性のある銀治津である。L Iから出土した遺物には、集中して確認できた箇所などは認められず、調査区に散在していた。なお、堆積層の掘り込みに際しては、主として唐鎌を使用したため、石鎚など小型の遺物についてはサンプリングエラーが生じた可能性があると考えている。

### 遺物 (図16・17、写真6)

**縄文土器** 図16-1は早期中葉の口縁部片で、口端部上面に刻みを入れ、内外面には口縁に沿って刺突文を施している。同図5は前期中葉、大木2a式土器の深鉢胴部片で、山形状の沈線文に、

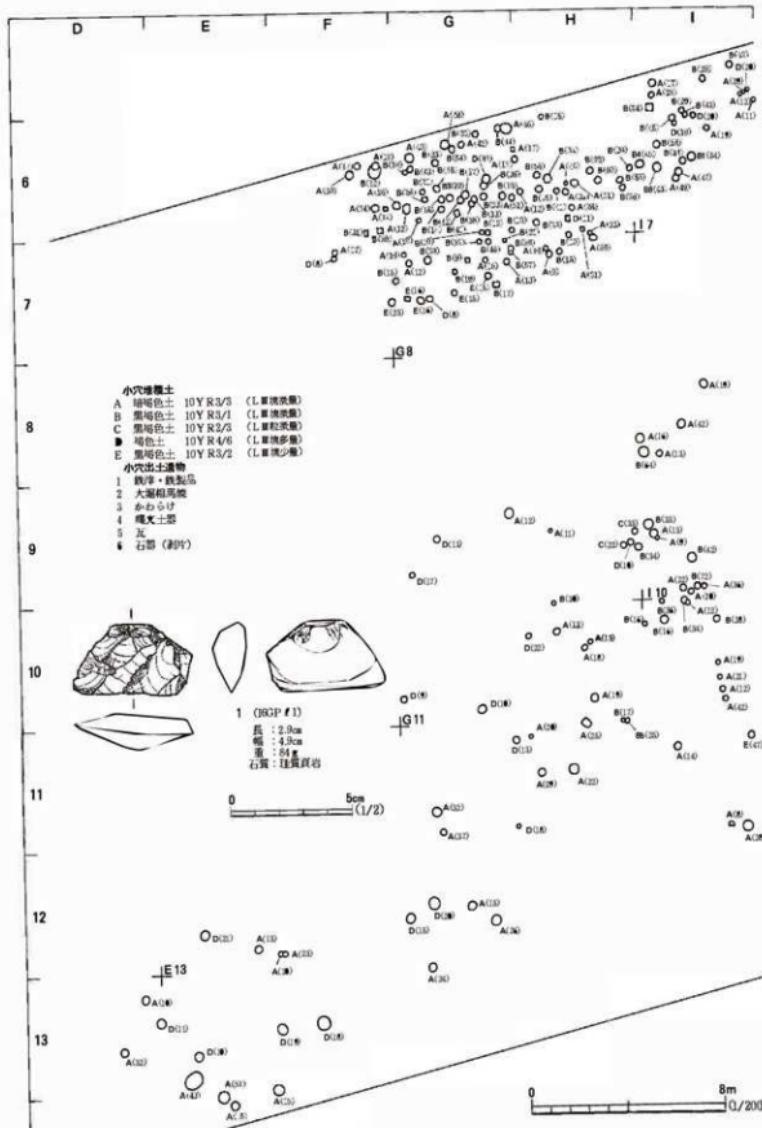


図14 小穴群、出土遺物（1）

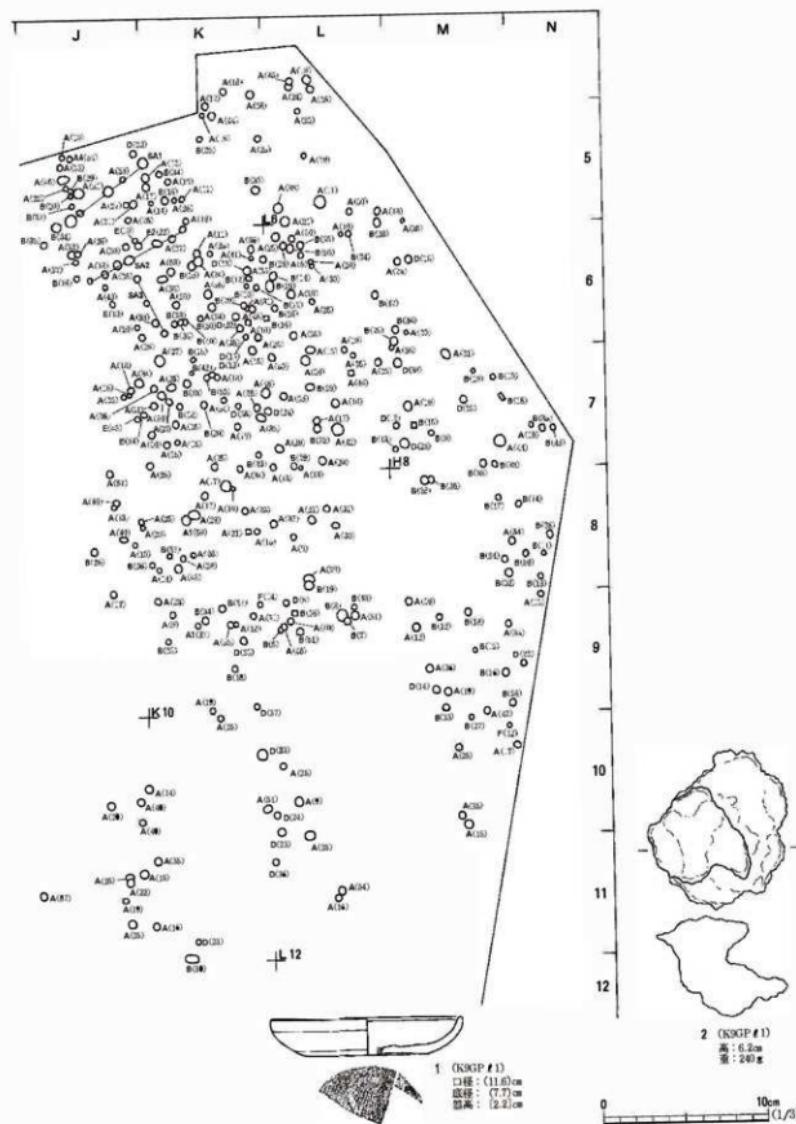


図15 小穴群、出土遺物（2）

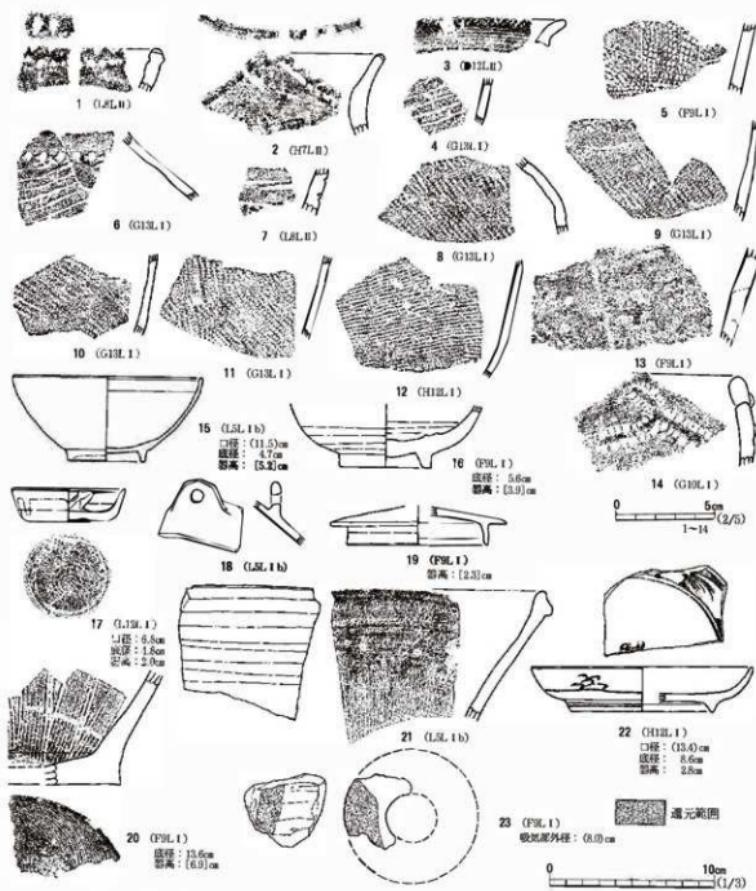


図16 遺構外出土遺物（1）

刺突文帯で文様を描いている。同図7は前期中葉の浮島系土器の深鉢胴部片で、器面に太めの平行沈線を施している。同図2・14は中期前葉の土器片である。2は大木7b式土器に併行する口縁部片で、波状を呈し、口端部に刻みを付けている。14は阿玉台1式土器に比定される口縁部片で、器面に有筋沈線と隆線で「入」字状の文様を描いている。同図8～12は器面に地文のみ見られる深鉢形土器胴部片で、8～11は斜行縦文、12は撚糸文を施す。同図13は無文地の土器片である。

**弥生土器** 図16-3・4・6は、弥生時代の土器片である。3は中期後半の甕の口縁部片で、口端上面に縦文を施す。4・6の器面には撚糸圧痕文で施文している。同図8～11は斜行縦文、

同図12は撲糸文を施している。

**陶磁器・羽口** 出土した陶器片のほとんどが大堀相馬産のものである。器種は、碗、擂鉢、土瓶、ひょうそくで、その大半は碗の破片である。図16-15・16は灰釉碗で、削り出し高台部分を除いて、均一に軸がかけられている。同図17は鉄軸の掛けられたひょうそくで、底面には回転糸切り痕が明瞭に残っている。同図18・19は青緑色に発色した軸をかけた土瓶である。同図20・21は底部を除いて鉄軸を掛けた擂鉢片である。同図22は18世紀後半ごろの肥前産の染付皿片で、体部内面に草花文を、底部内面中央に五弁花印判がある。同図23は直径8cmほどの羽口小片である。

**石 器** 図17-1は、旧石器時代の珪質岩製の彫器である。厚さ4mmの石刃または縦長の剥片を素材とし、石の長軸に対し平行な彫刀面を、背面右側に作り出したもので、「小坂型彫器」と呼ばれるものに類似する。彫刀面の先端は欠損している。背面左側縁には、細かな調整剥離を連続して加えられている。同図1は、宅地造成の盛土(L1)中から出土しており、調査区内に旧石器を包含した地層は見られない。同図2は、先端部を欠損した流紋岩製の凹基無茎石鎌である。

(阿 部)

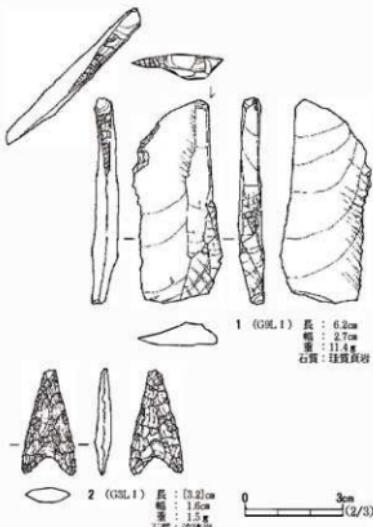


図17 遺構外出土遺物(2)

### 第3章 まとめ

切付遺跡の発掘調査では、土坑24基、柱列跡3基、溝跡1基そして479個の小穴群を確認した。本遺跡の上限は、図17-1に示した彫器から、旧石器時代まで遡るが、当時の石器を包含した地層は調査区内では確認できない。次に、縄文時代の痕跡は、遺構としては8基の落し穴状土坑(SK1・5・7～9・11・14・24)を確認した。縄文時代の遺物は少ないものの、縄文早期後半、前期前葉、中期前葉、晩期中葉の土器片が出土している。弥生時代になると、遺構は確認できなかったものの、ごく僅かな土器片のみ出土した。その後、本遺跡では人の痕跡が途絶え、近世まで遺構と遺物は認められない。以下では、旧石器と、裏込土を伴う土坑に焦点を絞ってまとめとする。

**旧 石 器** 本遺跡の上限は、図17-1に示した珪質岩製の小坂型彫器から旧石器時代に遡るものと推測される。惜しむべきは、彫器の出土層位が宅地造成時の盛土中であること、そして本遺跡

の今回の調査区内では旧石器を包含した地層が無かったことである。おそらく、東流する笹鶴川周辺に旧石器を包含した地層が存在する可能性が高いと考えられる。また、石器に使用された珪質頁岩の産地は、浜通り地方には存在せず、最も近い珪質頁岩の産地は、福島県内では福島市相上川・松川流域のみである。本遺跡周辺で旧石器の出土したことで知られるのは、本遺跡から南へ2kmほどどのところに片倉地区的珪質頁岩の産地がある。この遺跡は、次編で報告する片倉遺跡の南側の段丘平坦面(標高約120m。高位II段丘面)上にあり、ここから頁岩製の石刃石核(長9.8cm、幅7.7cm、厚4.5cm)が1点表面採集されている(松本1986)。以上2点が、南相馬市原町区内を東流する斯田川、太田川流域で確認できる旧石器の資料である。

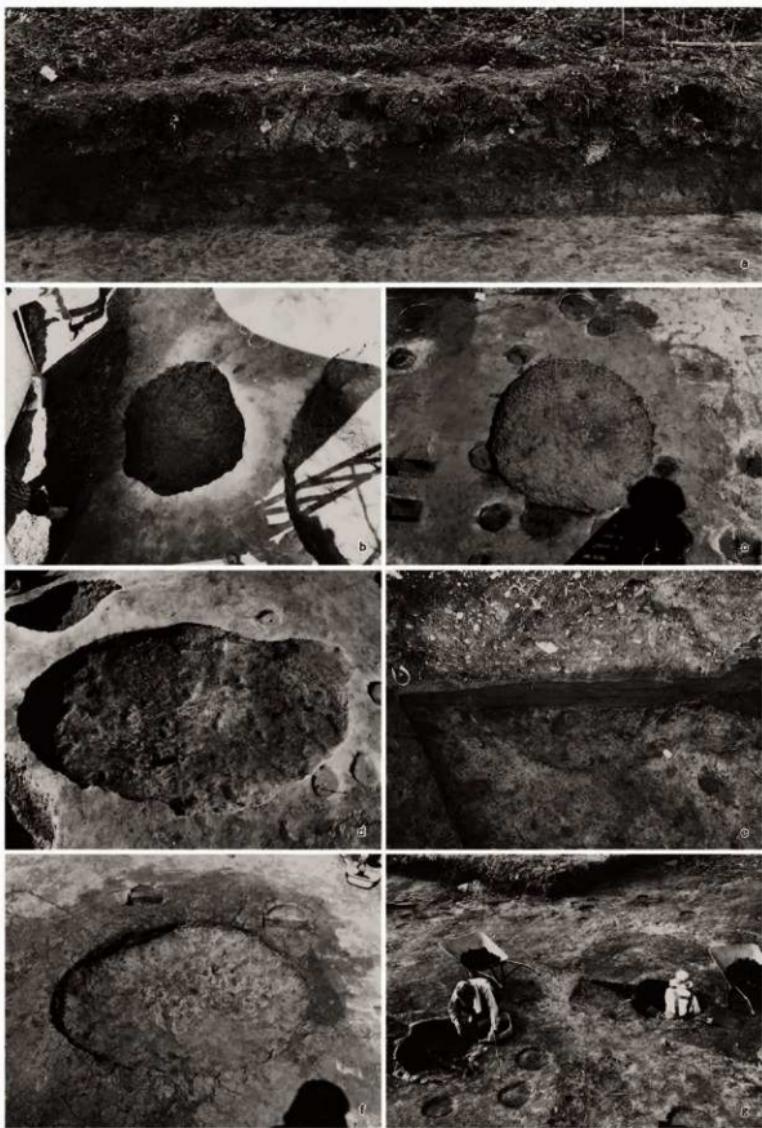
**裏込土を伴う土坑** 裏込土を伴った土坑は、調査区北東側で7基(SK16~18・22・25・27・28)を確認した。これらには、掘形を伴うことの他にいくつか共通点が見られる。第一点は、円形または楕円形を呈した底面の面積が0.5~0.7m<sup>2</sup>であること、次に掘形内に充填した粘質の裏込土で成形された周壁が垂直に立ち上がること、最後に粘質土で成形した周壁内側に堆積した土は木炭を含んだ黒色系の土であることが挙げられる。粘質土で成形した周壁内側の底面を見ると、27号土坑を除く6基では平坦な底面を成形し、27号土坑では裏込土と同質の粘質土を底に貼り付け、凹面鏡状に成形している。16・18・25・27・28号土坑の底面縁には、幅の狭い溝が底面縁に沿って全周する。27号土坑を観察すると、底の溝内には幅3cm前後の板材がはめ込まれていた可能性が高いと考えられる。遺存状況の良好な27号土坑から分かれる構築方法は、まず予定している穴の大きさの2倍から2.5倍の底面積を持つ掘形を造り、内部に粘質土(ℓ2)を積み凹面鏡状に成形し、成形した土の外縁に沿って板材を垂直に立て、板材同士を固定する。板材の固定作業と併行して、背後に裏込土(ℓ3)を充填していくといった工程が考えられる。この種の土坑の機能については、周壁に板材を当て、27号土坑のように底面にも粘質土を貼るなどの遺存状況から推測すると、内部に水を溜めて置く穴の可能性が高い。この種の土坑内およびその周辺からは、銀鍊・精鍊銀治の工程で排出される塊形鉄滓や着色性のある鉄滓、小さな鉄片、砥石などが木炭混ざりの覆土から出土している。また、元地主の話によると、先祖が銀治屋を生業としていたと伝えられていることも考え合わせると、「裏込土を伴う土坑」は、銀治作業に関連した穴の跡であった可能性が高い。この事例に類似したものが、権萬町上小塙にある銀治屋遺跡で確認されている。銀治屋遺跡では、裏込土を伴う円形土坑2基(188・189号土坑)が確認されている(能登谷他2001)。土坑の時期は、近世と考えられ、遺存状況の良い189号土坑を観察すると、粘質土を充填した円形の掘形を持ち、直径1.2mの円形の底面縁に幅の狭い溝が全周している。その堆積土中には、木炭が比較的多く混入していたという特徴も認められる。銀治屋遺跡では、この種の土坑周辺から、上屋を伴う近世の銀冶炉跡(SWk1)が1基確認されている。切付・銀冶屋遺跡で確認された「裏込土を伴う土坑」の機能については、銀治屋の作業に関連した穴の跡で、穴の内側に粘土と板で造作を施している状況から判断して貯水用として用いられた可能性が高いと考えられる。

(阿部)



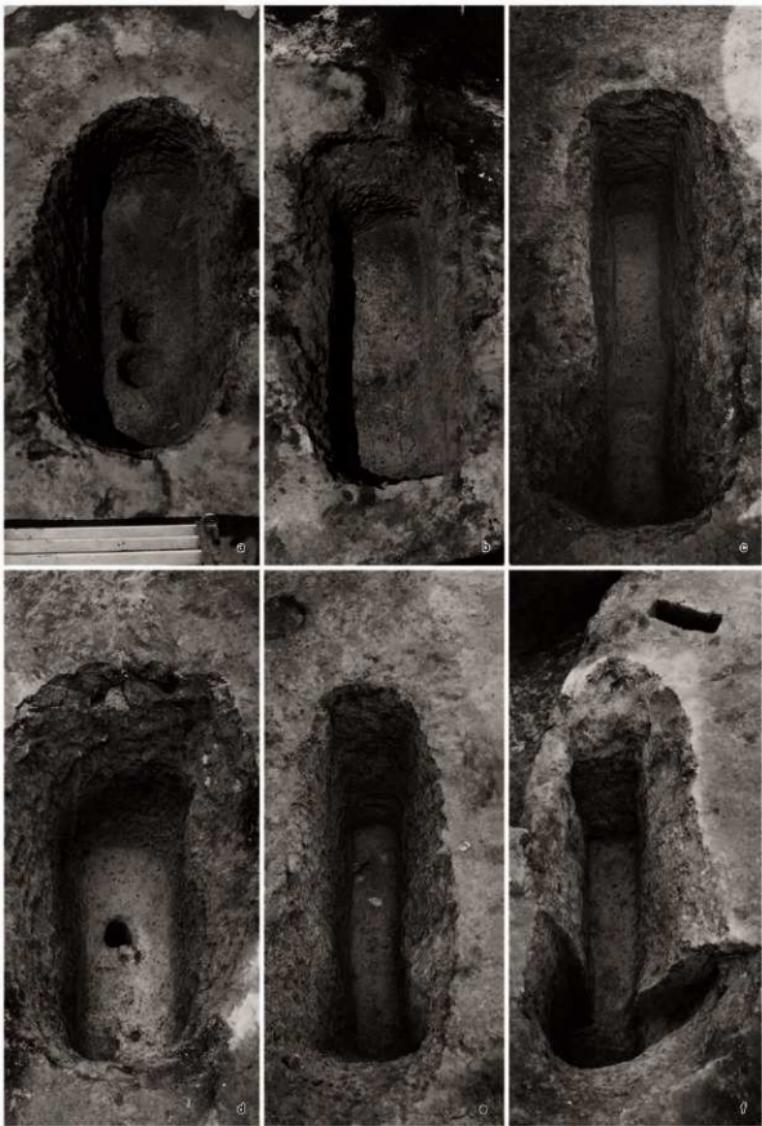
1 調査区全景

a 調査区遠景（南上空から）  
b 調査区近景（北上空から）



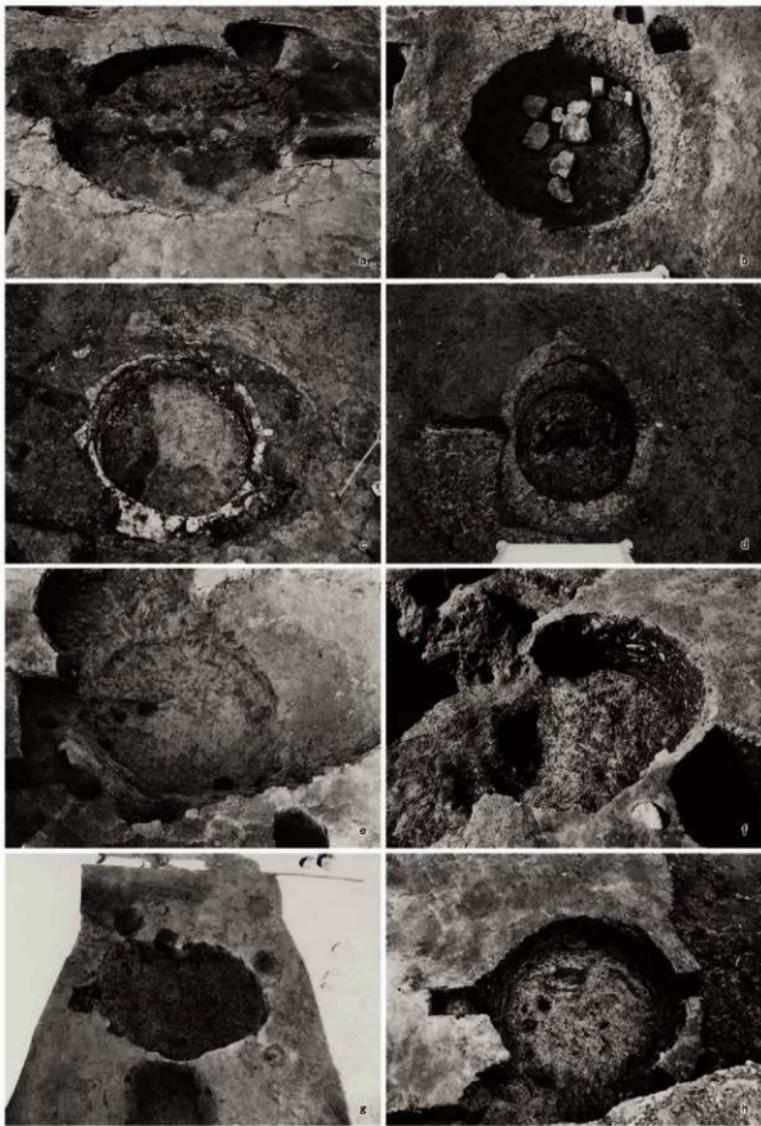
2 基本土層、土坑（1）

a 基本土層（東から）  
b 3号土坑全景（南から）  
d 6号土坑全景（南東から）  
f 13号土坑土層（南から）  
c 4号土坑全景（東から）  
e 10号土坑全景（北から）  
g 作業風景（西から）

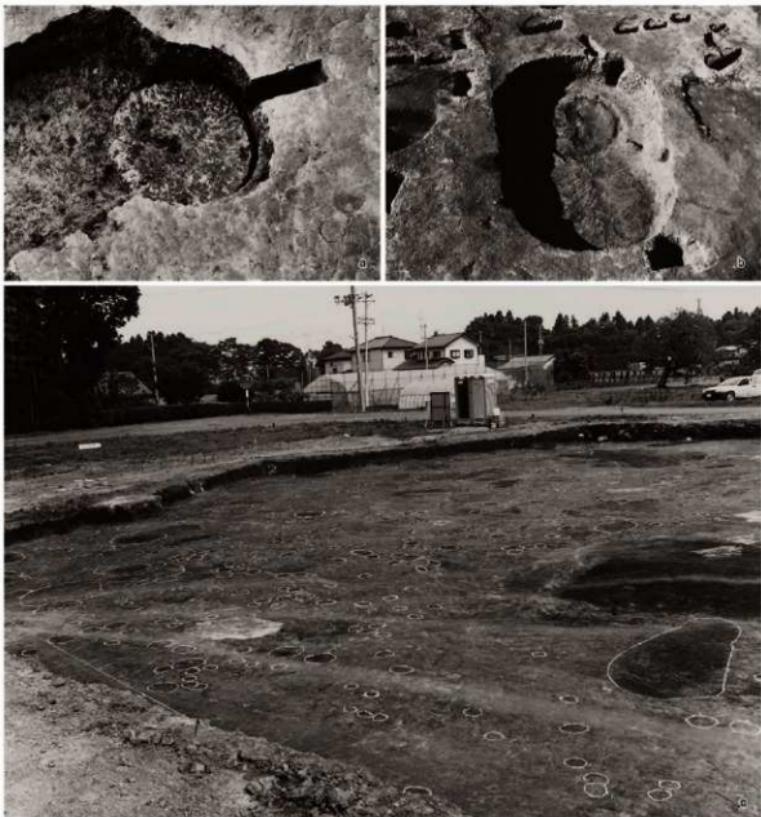


3 土坑 (2)

a 5号土坑全景（東から） b 7号土坑全景（東から） c 8号土坑全景（南から）  
d 14号土坑全景（東から） e 9号土坑全景（南から） f 11号土坑土壁（南東から）

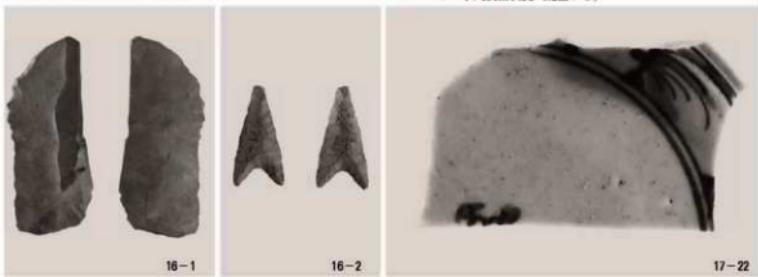


4 土坑 (3)



5 土坑(4)・小穴

a 27号土坑全景(東から) b 28号土坑全景(南から)  
c 小穴様出状況(北西から)



6 出土遺物



# 第5編 片倉遺跡

遺跡略号 MSC-KK

所在 地 南相馬市原町区片倉字片倉

調査期間 平成19年8月7日～9月21日

調査員 阿部 知己・今野沙貴子



## 第1章 調査経過

片倉遺跡は、平成10年度に実施した表面調査によって、近世相馬藩の野馬土手跡が延伸する箇所として推測された(福島県教育委員会1999)。平成17年11月と平成18年6月の2次にわたって、常磐自動車道建設地内の10,800m<sup>2</sup>を対象に試掘調査を実施し、太田川に面した段丘縁辺部の900m<sup>2</sup>が保存を要する面積とされた(福島県教育委員会2006・2007)。以下に、調査の概要を記す。

8月6日には、切付遺跡から調査員1名が移動し、調査区の範囲確認や周辺住民への挨拶、そして器材の搬入を実施した。8月7日、重機を導入し表土剥ぎを行った。試掘調査の結果から、厚い盛土の直下から竪穴住居跡の床面が確認できる知見が得られていたため、掘削の深さに気を配りながら表土剥ぎを実施した。8月20日、作業員10名が切付遺跡から移動し、本格的な調査に着手する。調査区の西縁に沿って、トレーナーを設け堆積土層の確認作業を実施したところ、盛土を含む表土下に、黒褐色砂質土(L II)そして基盤をなす褐色砂質土(L III)が堆積することを確認した。

L II中には遺物を全く包含していなかったが、各グリッド内において堆積土層を除去するたびに、遺構の確認作業を実施した。

8月下旬には、検出作業を開始してまもなくL II上面で竪穴住居跡を確認し、L IIの掘り下げと



図1 片倉遺跡調査区位置図

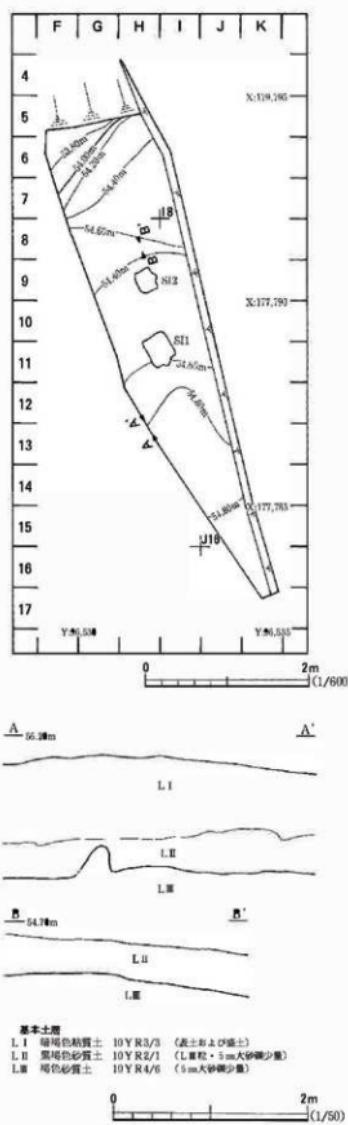


図2 遺構配置図、基本土層

ともに、検出遺構の精査を併せて行った。調査の進捗に伴い、堅穴住居跡以外の遺構は無いことが次第に分かってきた。

9月上旬には、降雨による段丘上からの出水や土砂流失を防ぐための作業を行いながら、再度検出作業を実施し、掘り残しが無いことを確認した。9月13日には、発掘調査を終了した。9月21日には、福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団と東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所による現地の終了確認及び引き渡しを実施した。後日、調査区については埋め戻しを行った。平成19年度の片倉遺跡の発掘調査で検出した遺構は堅穴住居跡2軒である。発掘調査に要した日数は延べ25日である。

(阿部)

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺構の分布

片倉遺跡では、太田川南岸の段丘縁辺付近の平坦面を対象として発掘調査を実施した。検出された遺構は、平安時代の堅穴住居跡2軒である(図2, 写真1参照)。

片倉遺跡の占地する段丘上は、圃場整備を受けているものの、現況は概ね平坦である。確認された堅穴住居跡は、段丘法面肩より2mほど南側に造られている。遺構の分布は少ないが、太田川南岸の段丘平坦面上には、今回確認された住居跡以外にも平安時代の遺構が散在する可能性が高い。調査区の全域にわたって、圃場整備時の盛土が90cm前後の厚さで堆積していた。その直下に黒褐色砂質土(L II)が堆積し、この地層が平安時代の遺構検出面である。検出作業開始直後に住居跡の床面を確認したことから推測すると、圃場整備の際

にL IIは約20cm以上削られた可能性が高い。また、L II中からは、遺物は全く出土しなかった。

## 第2節 基本土層

調査区の基本土層については、色調、混入物等から以下の3層に細分された。堆積状況の確認は、調査区南西端と北側中央の2箇所で観察を行っている。図2と写真2に基本土層を示した。

L Iは、圃場整備時の盛土を含む表土で、遺物は全く含まれていない。L Iは暗褐色粘質土で、その層厚は60~90cmほどで、南に向かって薄くなっている。

L IIは、黒褐色砂質土で、調査区のほぼ全域で確認できた土層である。平安時代の竪穴住居跡は、この層を掘り込んで造られている。L IIの層厚は35~45cmで、無遺物層である。

L IIIは、褐色砂質土で、丘陵平坦面のほぼ全域を覆った基盤をなす地層で、無遺物層でもある。L IIIの層厚は確認できていないが、北側段丘法面で確認したところ、L IIIの直下は砂礫層となっている。

(阿部)

## 第3節 竪穴住居跡

片倉遺跡では、竪穴住居跡2軒の調査を実施した。いずれの住居跡も周壁は地形の変化により認められず、床面のみを確認できた。

### 1号住居跡 S I I

#### 遺構(図3、写真2・3)

本遺構は、調査区中央のH10・11、I10・11グリッドに位置し、L II上面で検出した。本遺構は平成17年度の試掘調査の結果検出された。遺存状態が悪く、検出時すでに床面が露出していた。平面形は、概ね正方形で、床面西側の方位はN33°Wである。規模は、残存した床面範囲(図3の細い実線範囲)で南北長374cm、東西長356cmである。周壁は壊され不明である。貼床の厚さは検出面から2~8cmである。堆積土は、褐色を呈した単一層で、この上面でカマド燃焼部の底面を検出したことから貼床土と考えられる。

カマドは、南壁中央付近で確認した。カマドの大半は壊され、燃焼部の底面のみを確認した。その奥行は南側床面から52cmほど南へ張り出し、その上面で焼土の広がりを確認した。焼土はカマド燃焼部の底面にまで及んでおり、貼床土が被熱変色したものであることを確認した。焼土の厚さは最大10cmである。床面から小穴は検出されなかった。

#### 遺物(図4、写真4)

遺物は、床面から土師器片13点が出土した。そのうち、2点を図4-1・2に示した。1は、クロ成形した土師器の高台付き焼で、口縁部を欠損している。内面に黒色処理が施され、ヘラミガ

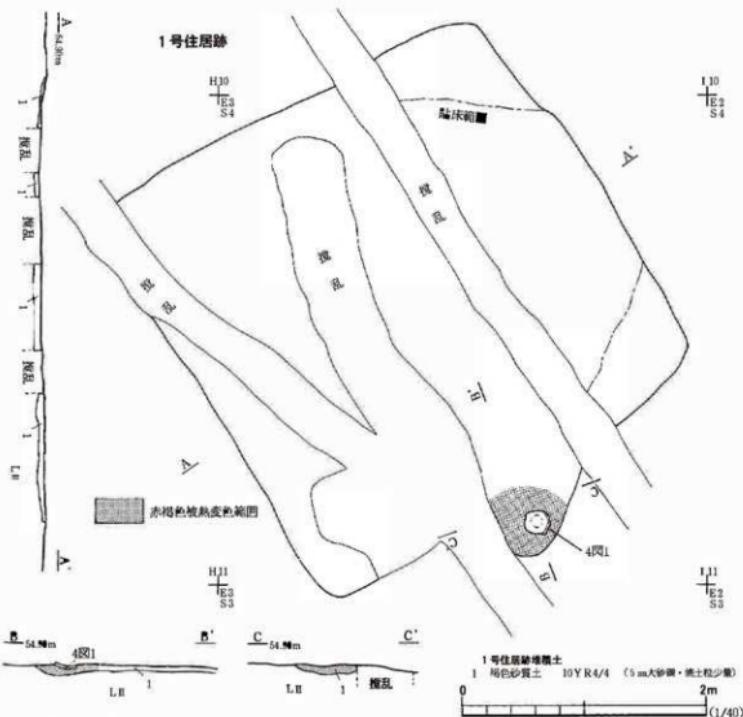


図3 1号住居跡

キ調整されている。外面も回転ヘラケズリ調整後に、ヘラミガキ調整されている。2は、ロクロ成形の土師器裏片で、口縁部は「く」字状に外傾する。外面調整は、器面全体に横ナデを施した後、胴部下半にはヘラケズリを施している。内面調整は、全体に横ナデを施した後、胴部下半にはハケ調整を施している。

### まとめ

本遺構は、正方形の竪穴住居跡で、規模は南北長374cm、東西長356cmである。遺存状態が悪く、貼床された床面とカマド燃焼部のみを確認した。時期については、出土土器から9世紀後半と考えられる。



2号住居跡 S I 2

## 遺構 (図4, 写真3)

本遺構は、調査区中央部北寄りのH 9グリッドに位置し、L II上面で検出した。遺存状態が悪く、検出時すでに床面が露出していた。平面形は、北西-南東方向に主軸を持つ長方形で、床面西側の方針はN19°Wを指す。規模は、残存した床面範囲(図4の細い実線範囲)で南北長314cm、東西長226cmである。周壁については、壊されていて不明である。堆積土は褐色の単一層で、この上面でカマド焼部の底面を確認したことから貼床土と考えられる。貼床土の厚さは4~12cmである。

カマドは、東壁中央で検出した。床面東側から東へ42cmほど張り出した内部には、焼土の広がりを確認した。焼土は、カマド底面にまで及んでおり、貼床土が被熱変色したもの



図4 2号住居跡、1号住居跡出土遺物

## 第5編 片倉遺跡

であることを確認した。焼土の厚さは最大18cmである。小穴は検出されなかった。本遺構から遺物は出土していない。

### まとめ

本遺構は、長方形の竪穴住居跡で、規模は南北長314cm、東西長226cmで、南側にあるS I 1より小振りである。遺存状態が悪く、貼床された床面とカマド燃焼部のみを確認した。時期については、S I 1との関連から9世紀後半頃と考えられる。

(今野)

## 第3章 まとめ

片倉遺跡の発掘調査で確認された遺構は、平安時代の竪穴住居跡2軒である。確認した2軒の住居跡は、いずれも遺存状況が悪く、床面およびカマド燃焼部の底面のみを確認した。時期については、出土遺物から9世紀後半と考えられる。段丘平坦面上には、さらに多くの平安時代の住居跡が存在した可能性が高いと考えられる。

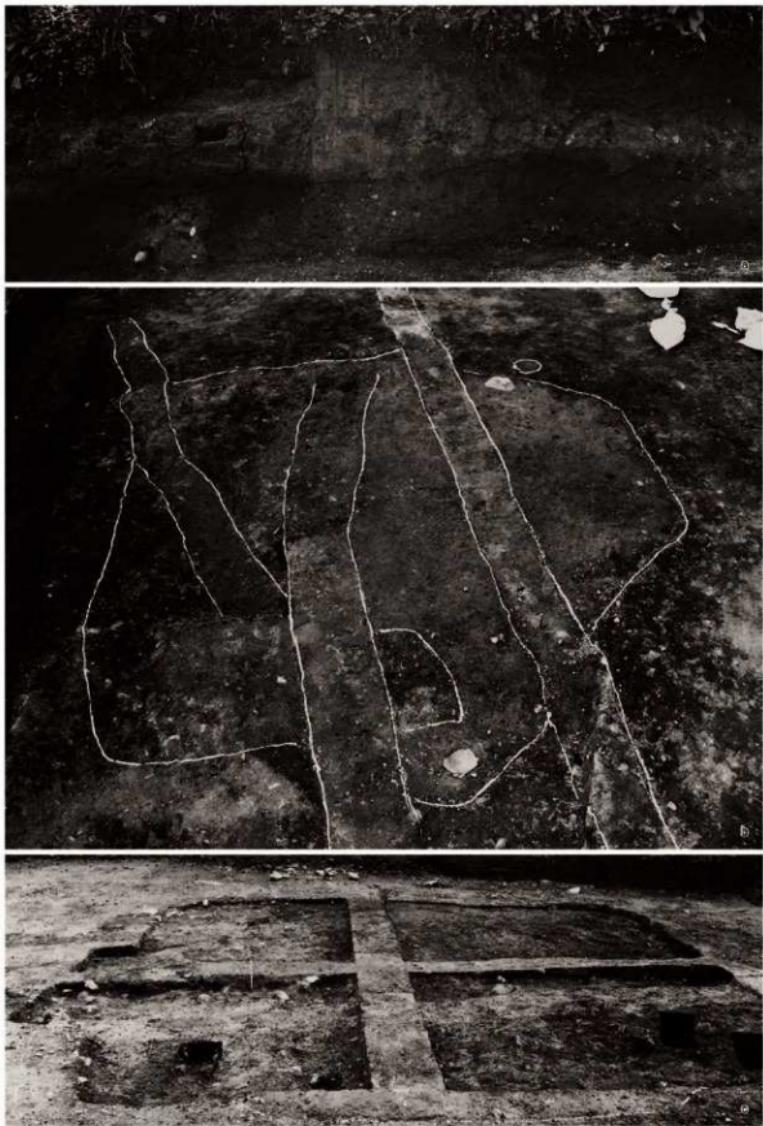
本遺跡の立地を見ると、太田川の南岸の河岸段丘上と好条件であったにもかかわらず、確認できた遺構・遺物は、平安時代の住居跡と、それに伴う土師器片以外に全く確認できていない。片倉地区周辺にある遺跡の状況を見てみると、太田川中流域における平安時代の遺跡は、本遺跡以外に確認できおらず、太田川を挟んで北側段丘面に位置する馬場地区の原B遺跡でも、平安時代の遺構・遺物は確認されていない(国井他2005)。一方、本遺跡から西側の太田川上流域では、羽山B遺跡と八重米坂B遺跡からは平安時代の遺物・遺構が確認されている(藤谷他1994)。羽山B遺跡では、9世紀代の踏み石ゴケ付きの型鉄炉跡1基と、遺物包含層から10世紀の土師器杯が出土している。八重米坂B遺跡では、9世紀代の土師器片が遺構外から出土している。

(阿部)



1 調査区全景

a 調査区遠景（南西上空から）  
b 調査区近景（東上空から）



2 基本土層, 1号住居跡

a 基本土層(東から)  
b 1号住居跡全景(西から)  
c 1号住居跡床土層(東から)



3 1・2号住居跡



a 2号住居跡全景（西から）  
b 1号住居跡遺物出土状況（北から） c 2号住居跡カマド土器（南から）



4 出土遺物





## 付編1 福島県南相馬市原町区小池田遺跡・戸鳥土遺跡・ 切付遺跡出土炭化材・木炭の放射性年代測定結果

株式会社加速器分析研究所

### はじめに

本報告では、福島県南相馬市原町区小池田遺跡、戸鳥土遺跡、切付遺跡で確認された遺構から出土した炭化材及び木炭について株式会社加速器分析研究所に依頼し、放射性炭素年代測定(AMS法)を実施し、表1・2の結果が報告された。

分析試料は、試料番号FB.H18KID1、FKS1~13の合計14点である。この内、資料番号「FB.H18KID1」は、平成18年度に小池田遺跡1次調査時に出土した炭化材である。

なお、試料番号「FB.H18KID1」を除く13点の分析試料の来歴等については、出土場所、出土場所の緯度経度、試料の大きさと重さ以外は分析の客観性を担保するために加速器分析研究所には知らせていない。

### 1. 測定目的と測定対象試料

<sup>14</sup>C年代測定によって遺構の廃絶時期を明らかにしたい。

小池田遺跡(1次調査)の対象試料は、1号集石遺構内2層から出土した炭化材(FB.H18KID1)の計1点である。

小池田遺跡(2次調査)の対象試料は、1号住居跡内7層から出土した炭化材(FKS1~5)、3号住居跡内2層から出土した炭化材(FKS2~6)、11号土坑の底面から出土した炭化材(FKS3)、16号土坑内5層から出土した炭化材(FKS4)、1号木炭窯跡内7・8層から出土した木炭(FKS7~8)、2号木炭窯跡内7層から出土した木炭(FKS9~10)の計10点である。

戸鳥土遺跡の対象試料は、1号住居跡内2層下位と底面から出土した炭化材(FKS11~12)の計2点である。

切付遺跡の対象試料は、16号土坑内4層から出土した木炭(FKS13)である。

### 2. 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA(Acid Alkali Acid)処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。

- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

### 3. 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9S BH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により<sup>13</sup>C/<sup>14</sup>Cの測定も同時に行う。

### 4. 算出方法

- 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用した。
- 過去における大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定し、1,050年を基準年とする。
- 誤差は、複数回の測定値について $\chi^2$ 検定を行い、測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求め、みなせない場合には標準誤差から求められる。
- $\delta^{13}\text{C}$ の値は、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{14}\text{C}$ の値を用いた。
- <sup>14</sup>C年代値との誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。
- 校正暦年代計算ではIntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、●xCalv3.10校正プログラム(BronkRansey 1995 BronkRansey 2001)を使用した。

### 4. 測定結果

小池田遺跡(1次調査)出土試料の<sup>14</sup>C年代は、1号集石遺構内2層より出土の炭化材(FK1,H18 KID1)で6220±40yrBPである。曆年較正年代( $1\sigma = 68.2\%$ )については5200~5250BC(15.5%)・5230~5200BC(13.8%)・5170~5070BC(35.9%)である。

小池田遺跡(2次調査)出土試料の<sup>14</sup>C年代は、1号住居跡内7層出土の炭化材(FKS1)が5000±40yrBP、3号住居跡内2層出土の炭化材(FKS2)が2880±30yrBP、11号土坑底面出土の炭化材(FKS3)が1260±30yrBP、16号土坑内5層出土の炭化材(FKS4)が1320±30yrBP、1号住居跡7層出土の炭化材(FKS5)が5430±40yrBP、3号住居跡内2層出土の炭化材(FKS6)が2850±30yrBP、1号木炭窯跡内7層出土の木炭(FKS7)が810±30yrBP、1号木炭窯跡内8層出土の木炭(FKS8)が780±30yrBP、2号木炭窯跡内7層出土の木炭(FKS9)が610±30yrBP、2号木炭窯跡7層出土の木炭(FKS10)が590±30yrBPである。曆年較正年代( $1\sigma = 68.2\%$ )についてFKS1は3960~3830BC(19.0%)・3880~3800BC(49.2%)である。FKS2は1120~1010BCである。FKS3は685~755AD(58.1%)・760~775AD(10.1%)である。FKS4は650~700AD(54.7%)・750~770AD(13.5%)である。FKS5は、4335~4310BC(22.7%)・4305~4255BC(45.5%)である。FKS6は1060~870BC(55.9%)・960~830BC(12.3%)である。FKS7は、1210~1260ADである。FKS8は1220~1275ADである。FKS9は1300~1330AD(27.9%)・1340~1365AD(27.8%)・1380~1395AD(12.5%)である。FKS10は1315~1355AD(51.5%)・1355~1405AD

●(16.7%)である。

戸鳥土遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代は、1号住居跡2層下位出土の炭化材(FKS11)が $1160 \pm 30$ yrBP、1号住居跡床面出土の炭化材(FKS12)が $1130 \pm 30$ yrBPである。暦年校正年代( $1\sigma = 68.2\%$ )についてFKS11では $750 \sim 780$ AD(3.5%)・ $810 \sim 900$ AD(48.4%)・ $920 \sim 950$ AD(16.3%)である。FKS12は、 $890 \sim 900$ AD(12.6%)・ $910 \sim 970$ AD(55.6%)である。

切付遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代は16号土坑内4層より出土の木炭(FKS13)で $110 \pm 30$ yrBPである。暦年校正年代( $1\sigma = 68.2\%$ )については、 $1600 \sim 1730$ AD(17.1%)・ $1810 \sim 1890$ AD(43.1%)・ $1900 \sim 1930$ AD(8.0%)である。

化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料番号	遺跡名	遺構	層位	形態	種類	Libby Age (yrBP)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) (加速器)	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	pMC (‰)
FB-HIKIDI	小池田1次	1号馬道遺構	E.2	炭化材		$6220 \pm 40$	$-26.04 \pm 0.58$	$-538.2 \pm 2.1$	$46.85 \pm 0.21$
FKS1	小池田2次	1号住居跡	E.7	炭化材 クリ		$5450 \pm 40$	$-25.27 \pm 0.52$	$-495.6 \pm 2.7$	$53.84 \pm 0.27$
FKS2	小池田2次	3号住居跡	E.2	炭化材 クリ		$2850 \pm 30$	$-27.84 \pm 0.61$	$-301.7 \pm 2.7$	$69.83 \pm 0.27$
FKS3	小池田2次	11号土坑	底面	炭化材 クリ		$1260 \pm 30$	$-24.18 \pm 0.56$	$-145.6 \pm 3.1$	$85.44 \pm 0.31$
FKS4	小池田2次	16号土坑	E.5	炭化材 スギ		$1320 \pm 30$	$-26.71 \pm 0.61$	$-151.5 \pm 2.8$	$84.85 \pm 0.28$
FKS5	小池田2次	1号住居跡	E.7	炭化材 クリ		$5430 \pm 40$	$-22.87 \pm 0.71$	$-451.2 \pm 2.3$	$50.88 \pm 0.23$
FKS6	小池田2次	3号住居跡	E.5	炭化材 クリ		$2850 \pm 30$	$-26.82 \pm 0.76$	$-285.5 \pm 2.8$	$70.15 \pm 0.28$
FKS7	小池田2次	1号木炭窯跡	E.7	木炭 コナラ亞属コナラ節		$610 \pm 30$	$-28.72 \pm 0.66$	$-56.4 \pm 3$	$50.34 \pm 0.3$
FKS8	小池田2次	1号木炭窯跡	E.7	木炭 コナラ亞属クスギ節		$750 \pm 30$	$-26.16 \pm 0.85$	$-52.2 \pm 3.3$	$50.78 \pm 0.33$
FKS9	小池田2次	2号木炭窯跡	E.7	木炭 コナラ亞属クスギ節		$610 \pm 30$	$-25 \pm 0.66$	$-72.5 \pm 3.2$	$52.71 \pm 0.32$
FKS10	小池田2次	2号木炭窯跡	E.7	木炭 コナラ亞属クスギ節		$580 \pm 30$	$-26.4 \pm 0.54$	$-70.8 \pm 3.1$	$52.52 \pm 0.31$
FKS11	戸鳥土	1号住居跡	E.2下位	炭化材 クマシマ属イヌキ節		$1160 \pm 30$	$-28.65 \pm 0.57$	$-134.4 \pm 3$	$56.56 \pm 0.3$
FKS12	戸鳥土	1号住居跡	床面	炭化材 クリ		$1130 \pm 30$	$-26.74 \pm 0.58$	$-138.7 \pm 3.1$	$56.83 \pm 0.31$
FKS13	切付	16号土坑	E.4	木炭 モクレン属		$110 \pm 30$	$-23.81 \pm 0.57$	$-14.1 \pm 3.3$	$58.58 \pm 0.38$

## 参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data. *Radiocarbon* 19, 355-363
- Brenk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Brenk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Brenk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 Wiggle Matching radiocarbon dates. *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

表2 暦年較正年代

遺跡名	試料番号 出土遺構	$\delta^{14}\text{C}$ の補正無し			曆年較正 年代用 (yrBP)	曆年較正年代(1 $\sigma$ )	曆年較正年代(2 $\sigma$ )
		$\delta^{14}\text{C}$ (%)	pMC (%)	Age (yrBP)			
小池田1次	FB-H18KID1 1号集石造構	534.5 ± 2.1	46.55 ± 0.21	6140 ± 40	6224 ± 37	5300BC-5250BC(18.5%) 5250BC-5200BC(13.8%) 5200BC-5070BC(35.9%) 5070BC-3930BC(19.0%) 3930BC-3800BC(49.2%)	5310BC-5190BC(46.9%) 5180BC-5060BC(48.5%)
小池田2次	FKS1 1号住居跡	469.9 ± 2.5	53.01 ± 0.25	5100 ± 40	5094 ± 40	5100BC-3790BC(95.4%)	
小池田2次	FKS2 3号住居跡	-304.6 ± 2.5	69.54 ± 0.25	2920 ± 30	2884 ± 31	1120BC-1010BC(68.2%) 960BC-940BC(11.7%)	
小池田2次	FKS3 1号土坑	-144.2 ± 2.9	85.58 ± 0.29	1250 ± 30	1264 ± 28	685AD-755AD(58.1%) 755AD-75AD(10.1%) 650AD-700AD(54.7%) 700AD-730AD(7.9%) 730AD-770AD(22.5%)	660AD-820AD(9.7%) 840AD-860AD(1.7%)
小池田2次	FKS4 16号土坑	-154.4 ± 2.5	84.56 ± 0.25	1350 ± 20	1319 ± 26	650AD-700AD(13.5%) 700AD-770AD(22.5%)	
小池田2次	FKS5 1号住居跡	-489 ± 2.1	51.1 ± 0.21	5390 ± 30	5428 ± 35	4355BC-4310BC(22.7%) 4310BC-4255BC(45.5%)	1200BC-970BC(93.7%) 4350BC-4230BC(95.4%)
小池田2次	FKS6 3号住居跡	-301.3 ± 2.5	69.87 ± 0.25	2880 ± 30	2848 ± 31	1060BC-970BC(55.9%) 970BC-930BC(12.3%)	1120BC-920BC(95.4%)
小池田2次	FKS7 1号木炭窯跡	-94 ± 2.7	90.6 ± 0.27	790 ± 20	814 ± 26	1210AD-1260AD(68.2%)	1175AD-1270AD(95.4%)
小池田2次	FKS8 1号木炭窯跡	-94.3 ± 2.9	90.57 ± 0.29	800 ± 30	776 ± 29	1220AD-1275AD(68.2%)	1215AD-1280AD(95.4%)
小池田2次	FKS9 2号木炭窯跡	-72.9 ± 3	92.71 ± 0.3	610 ± 30	608 ± 27	1300AD-1380AD(27.9%) 1380AD-1365AD(27.8%) 1380AD-1395AD(12.3%)	1290AD-1410AD(95.4%)
小池田2次	FKS10 2号木炭窯跡	-73.5 ± 2.9	92.65 ± 0.29	610 ± 30	589 ± 27	1315AD-1355AD(51.5%) 1355AD-1300AD(3.5%) 1380AD-1405AD(16.7%)	1290AD-1370AD(68.1%) 1380AD-1420AD(27.3%)
戸鳥土	FKS11 1号住居跡	-132 ± 2.9	86.8 ± 0.29	1140 ± 30	1159 ± 28	810AD-900AD(48.4%) 900AD-950AD(16.3%)	770AD-970AD(96.4%)
戸鳥土	FKS12 1号住居跡	-133.9 ± 2.9	86.61 ± 0.29	1150 ± 30	1125 ± 28	890AD-960AD(12.6%) 960AD-970AD(55.6%) 970AD-980AD(39.7%)	820AD-850AD(1.7%) 860AD-900AD(96.4%)
切付	FKS13 16号土坑	-11.3 ± 3.1	98.87 ± 0.31	90 ± 30	114 ± 27	1690AD-1780AD(17.1%) 1810AD-1890AD(43.1%) 1900AD-1930AD(8.0%)	1680AD-1770AD(29.4%) 1800AD-1940AD(66.0%)

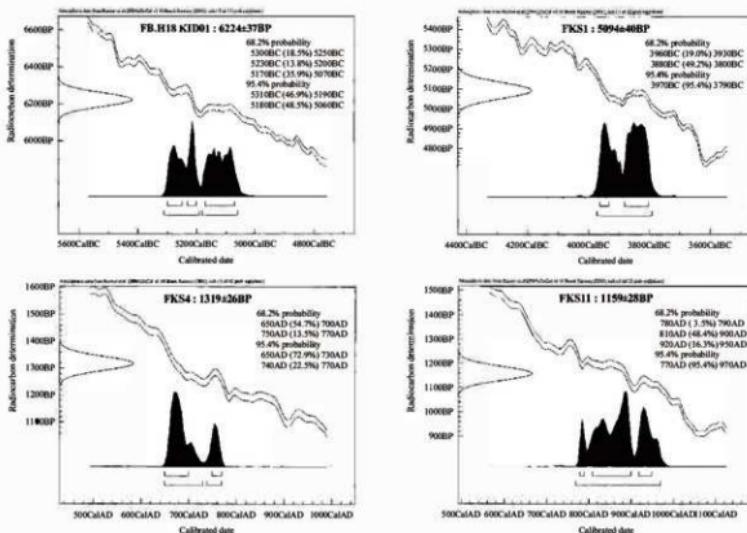


図1 曆年補正結果

## 付編2 福島県南相馬市原町区小池田遺跡・戸鳥土遺跡・ 切付遺跡出土炭化材・木炭の樹種同定結果

藤根 久 (株式会社パレオ・ラボ)

### はじめに

本報告では、福島県南相馬市原町区小池田遺跡2次調査、戸鳥土遺跡、切付遺跡で確認された遺構から出土した炭化材および木炭について、株式会社パレオ・ラボに依頼し、樹種同定を実施し、以下の結果が報告された。

### 1. 試料と方法

炭化材試料は、小池田遺跡2次調査、戸鳥土遺跡、切付遺跡から出土した炭化材13試料である(表1)。試料は、3断面(横断面・接線断面・放射断面)を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、銀ペーストを塗布した後乾燥させた。その後、金蒸着して走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-5900LV型)を用いて同定した。

試料は割折して、炭化材の新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柵目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、走査顕微鏡によって50~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によつて行った。

### 2. 結 果

全体として検出された炭化材の樹種は、常緑針葉樹のスギ、落葉広葉樹のクマシデ属イヌシデ節(以下、イヌシデ節と呼ぶ)、コナラ属コナラ節(以下、コナラ節と呼ぶ)、コナラ属クヌギ節(以下、クヌギ節と呼ぶ)、クリ、モクレン属の6分類群であった(表1)。

小池田遺跡2次調査から出土した炭化材・木

炭は、常緑針葉樹のスギ、落葉広葉樹のコナラ節、クヌギ節、クリであった。遺構別に見ると、縄文時代前期の1号住居跡と3号住居跡から出土した炭化材は、いずれもクリであった。該期における建築材および燃料材には本州東半部においてクリが多く出土していることが知られている(山田1993)。古代と思われる木炭窯跡から検出された木炭は、コナラ節とクヌギ節であった。これらコナラ属の樹木は、薪炭材として良く利用される樹木であり、両樹木を区別なく利用したものと考えられる。また、11号土坑の炭化材はクリであったが、16号土坑の炭化材はスギであった。

戸鳥土遺跡では、平安時代の1号住居跡から出土した炭化材は、落葉広葉樹のクリとイヌシデ節であった。

切付遺跡の近世の土坑から出土した炭化材は、落葉広葉樹のモクレン属であった。

以下に、同定根拠とした材組織の特徴を記載する。

### スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晚材の量が多く晩材の仮道管の壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きく開いたスギ型で1分野に2個ある。スギは、本州以南の暖帯から温帯下部の温帯のある谷間に生育する常緑高木である。日本海側では縄文時代に低地にスギ林が成立していたことが知られて

いる。材はやや軽軟で加工は容易である。

**クマシデ属イヌシデ節** (*Carpinus sect. Eucarpinus* カバノキ科 写真1-2)

放射組織が集合する部分と2~数個の小型の管孔が放射方向に複合し配列する部分がある。放射孔材である。道管の壁孔は、小型で交互状に密在、穿孔は単穿孔である。放射組織は方形細胞が混じるがほぼ同性、1~3細胞幅、道管との壁孔はやや大きく、集合放射組織がある。イヌシデ節は、山野に普通のイヌシデとアカシデ、乾いた山稜に生育するイワシデがある。クマシデ節には山地の谷沿いに多いサワシバとクマシデがある。いずれの材も丈夫で有用である。

**コナラ属コナラ亜属コナラ節** (*Quercus s. ubgen. Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真1-3)

年輪の始めに大型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁の角ばった小型の管孔が火炎状にかつ放射方向に配列する環孔材である。道管の穿孔は单一である。放射組織は単列および集合放射組織から構成される。コナラ節は、暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。代表的なコナラ節であるコナラは、加工がややしく乾燥すると割れや狂いが出やすい。

**コナラ属コナラ亜属クヌギ節** (*Quercus s. ubgen. Quercus sect. Cerris* ブナ科 写真2-1)

年輪の始めに大形の管孔が1~3層配列し、その後小型・厚壁の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材である。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性、単列のものと集合状のものがある。クヌギ節は、落葉性のドングリの仲間でそのうちのクヌギとアベマキが属する。い

ずれの種も暖帯の山林に普通の高木でクヌギ節は二次林に多い。材は重厚で割裂性が良い。現在は薪炭材として重要であるが建築材としては一般的ではない。

**クリ** (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真2-2)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状・塊状である。クリは、北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通に生育する落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性に優れている。

**モクレン属** (*Magnolia* モクレン科 写真2-3)

小型の管孔が単独または2~数個が複合して散在する散孔材である。道管の壁孔は階段状、穿孔は主に単穿孔である。放射組織は異性、1~3細胞幅、上下端に方形細胞がある。モクレン属は、暖帯または温帯に分布する落葉性の高木または小高木である。北海道以南の山地に生育するホオノキ・コブシ、本州と九州に生育するタムシバ、関東北部以西に生育するオオヤマレンゲ、中部地方西南部に生育するシデコブシがある。材質は、やや軽軟で割裂性は大であり割れや狂いが少なく加工しやすい材である。

### 参考文献

- 山田昌久 1993 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成一用材から見た人間・植物関係史一、植生史研究特別第1号,242。

表1 小池田遺跡、戸鳥土遺跡、切付遺跡における樹種同定結果

試料番号	遺跡名	遺構	層位	Lubby Age (yr±SD)	樹種
FKS1	小池田2次	1号住居跡	#7	589±16	ク リ
FKS2	小池田2次	3号住居跡	#2	288±30	ク リ
FKS3	小池田2次	11号土坑	底面	126±50	ク リ
FKS4	小池田2次	16号土坑	#5	132±30	スギ
FKS5	小池田2次	1号住居跡	#7	543±40	ク リ
FKS6	小池田2次	3号住居跡	#5	285±30	ク リ
FKS7	小池田2次	1号木炭窯跡	#7	81±30	コナラ 垂露コナラ節
FKS8	小池田2次	1号木炭窯跡	#7	79±30	コナラ 垂露クヌギ節
FKS9	小池田2次	2号木炭窯跡	#7	61±30	コナラ 垂露クヌギ節
FKS10	小池田2次	2号木炭窯跡	#7	54±30	コナラ 垂露クヌギ節
FKS11	戸鳥土	1号住居跡	#2下位	116±30	クマシダ 垂露クヌギ節
FKS12	戸鳥土	1号住居跡	床面	113±30	ク リ
FKS13	切付	16号土坑	#4	11±30	モクレン節

※ 「Lubby Age」については、「図版1」を参照。

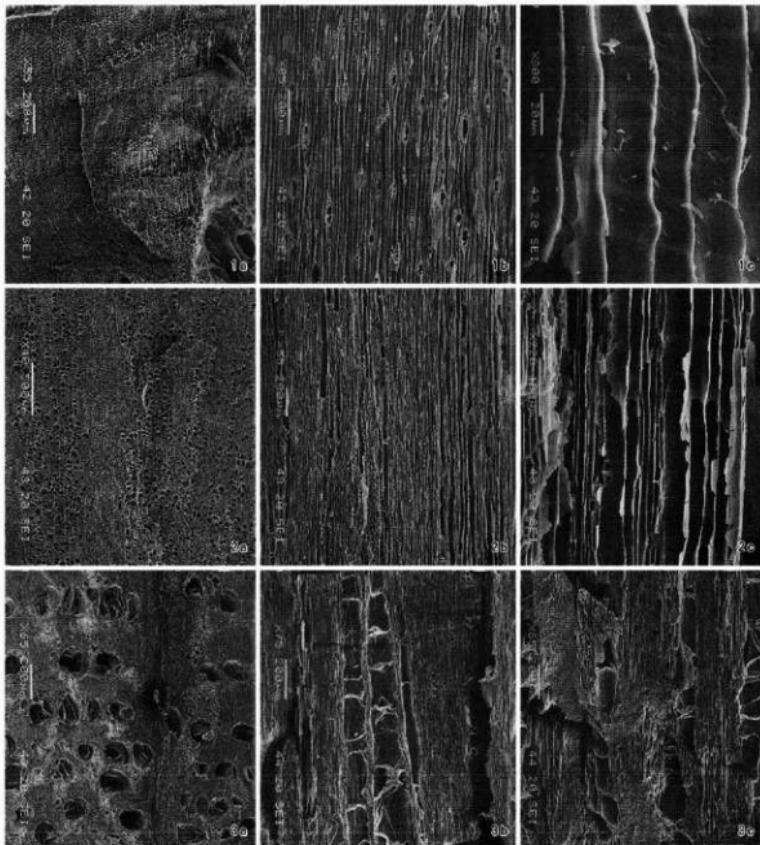


写真1 小池田遺跡、戸鳥土遺跡出土炭化材・木炭

a:横断面 b:接觸断面 c:放射断面  
 1a-c FKS4 小池田遺跡 16号土坑出土 スギ  
 2a-c FKS11 戸鳥土遺跡 1号住居跡出土 クマシダ  
 3a-c FKS7 小池田遺跡 1号木炭窯跡出土 コナラ節

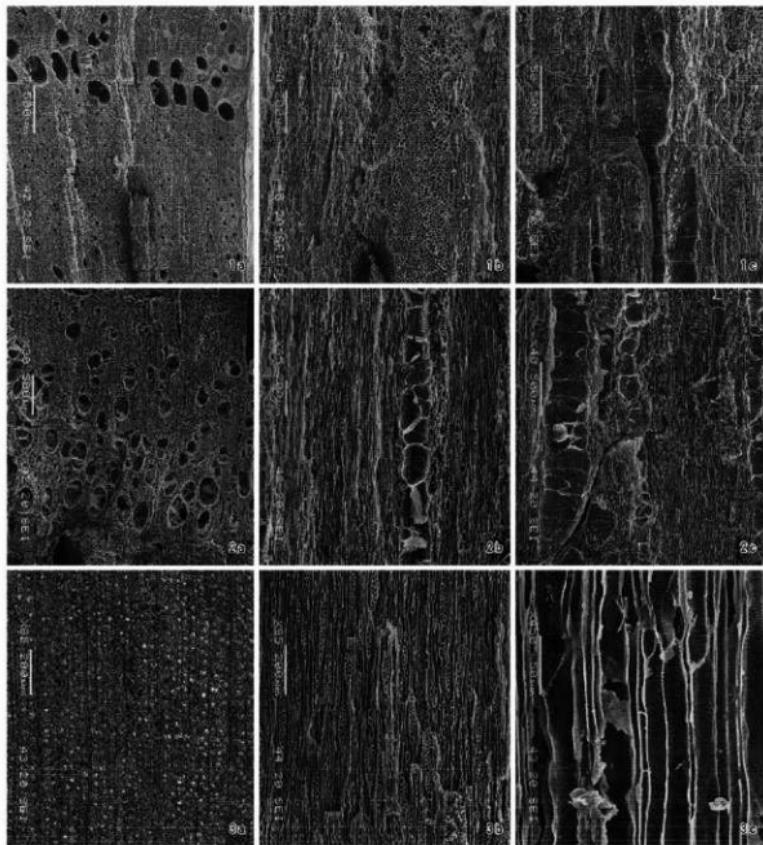


写真2 小池田遺跡、切付遺跡出土炭化材・木炭

a:横断面 b:接觸断面 c:放射断面  
1a-c FKS9 小池田遺跡 2号木炭窯時出土 クヌギ節  
2a-c PKS9 小池田遺跡 11号土坑出土 タブリ  
3a-c FKS13 切付遺跡 16号土坑出土 モクレン葉

## 報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどう いせきちょうさほうこく	51				
書名	常磐自動車道遺跡調査報告51					
シリーズ名	福島県文化財調査報告書					
シリーズ番号	第450集					
編著者名	吉田 功 阿部知己 塚 仙 区 今野沙貴子					
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団					
所在地	〒960-8115 福島県福島市山下町1-25					
発行年月日	西暦2005年 11月 30日					
ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系經緯度数 北、緯 東、経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			
小池田遺跡 (1次調査)	福島県南相馬市深野 字小池田	206	00317	37°30'12" N 140°56'35" E 37°30'10" N 140°56'33" E	20061018 20061205	1,000m <sup>2</sup> 道路(常磐自動車道)建設に伴う 事前調査
小池田遺跡 (2次調査)	福島県南相馬市深野 字小池田	206	00317	37°30'12" N 140°56'35" E 37°30'10" N 140°56'33" E	20070405 20070530	2,800m <sup>2</sup> 同上
戸鳥土遺跡	福島県南相馬市押金 字戸鳥土	206	00252 00318	37°37'50" N 140°55'40" E 37°37'45" N 140°55'35" E	20070604 20070719	2,000m <sup>2</sup> 同上
切付遺跡	福島県南相馬市鷲崎 字切付	206	00251	37°36'40" N 140°55'50" E 37°36'35" N 140°55'45" E	20070705 20070921	1,700m <sup>2</sup> 同上
片倉遺跡	福島県南相馬市片倉 字片倉	206	00315	37°35'50" N 140°55'57" E 37°35'45" N 140°55'55" E	20070607 20070921	900m <sup>2</sup> 同上
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
小池田遺跡 (1次調査)	集落跡	縄文時代	土坑(9) 集石遺構(3) 焼土遺構(1) 特殊遺構(3) 遺物包含層	绳文土器 石器 石製品		
小池田遺跡 (2次調査)	集落跡	縄文時代 古代	住居跡(3) 土坑(7) 木炭窯跡(2) 遺物包含層	绳文土器 土製品 石器 石製品		
戸鳥土遺跡	集落跡 塚跡	縄文時代 平安時代 中世 近世	住居跡(1) 土坑(4) 塚跡(1) 溝跡(1) 遺物包含層	绳文土器 土築器 古鏡	確認した塚跡は、「戸鳥土塚群」として遺跡番号「20000282」を別に与えられている。	
切付遺跡	集落跡	縄文時代 近世 近代	土坑(20) 柱列跡(3) 小穴(47) 溝跡(1) 遺物包含層	绳文土器 石器 陶磁器 羽口 銅製品・鉄滓		
片倉遺跡	集落跡	平安時代	住居跡(2)	土築器		
要約			小池田遺跡では、縄文時代前期前葉・中葉の住居跡を確認し、遺物は縄文前期中葉(大木4式)の土器が多量に出土した。 戸鳥土遺跡では、平安時代の集落跡、中世の溝跡そして塚跡を確認した。 切付遺跡では、縄文時代の落し穴状土坑、近世～近代の柱列跡・土坑・小穴を確認した。 片倉遺跡では、平安時代(9世紀後半)の住居跡を確認した。			

---

福島県文化財調査報告書 第450集

常磐自動車道遺跡調査報告51

小池田遺跡（1・2次調査）  
戸鳥土遺跡  
切付遺跡  
片倉遺跡

平成20年11月30日

編集 財団法人福島県文化振興事業団

発行 福島県教育委員会

財団法人福島県文化振興事業団

東日本高速道路株式会社

東北支社相馬工事事務所

印刷 三洋印刷株式会社

〒960-8688 福島市杉妻町2-16

〒960-8116 福島市春日町5-54

〒976-0042 相馬市中村字塚の原65-16

〒965-0053 会津若松市町北町上荒久田字鈴木163

---